
魔法少女リリカルなのはStrikers 一武闘家の心を受け継ぐ者達

アカツキ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔法少女リリカルなのはStrikerS―武闘家の心を受け継ぐ者達

【Nコード】

N5006V

【作者名】

アカツキ

【あらすじ】

さてみなさん。今からどのようなファイトの嵐が吹き荒れるのでしょうか？今回の舞台は魔法の世界。奏達を待ち受けるのは新たな出会い。新たな試練。奏たちは乗り越えることができるのでしょうか！？それではガンダムファイト！！レディー！！ゴー！！

プロローグ（前書き）

この小説は『東方の拳を受け継ぐ者』の続編です。今回は短いです。

ブローグ

奏 サイド

奏「ふう。今日も疲れた」

僕は今24歳。大学を卒業して今は教員採用試験に合格するために
猛勉強中だ。

奏「それにしても僕のこの身体能力はどうなっているんだろう？」

2年前。あの変な夢を見て以来身体能力が格段に上がっていた。

奏「考えるだけ時間の無駄かな・・・もう遅いから寝よう」

僕は考えることをやめて、ベッドに入って意識を手放した。

奏 サイドエンド

和葉 サイド

和「お疲れ様でした。俺はこれで失礼します。」

「・・・お疲れ様でした」

俺は今25歳で体育教師をしている。あの夢から俺は自分のやりた
いことを見つけることができた。家族からは猛反対を受けたが、何
とか勝ちを拾うことができた。

和「今はあの夢を見たことに感謝だな」

俺は一人暮らしのマンションに戻り、夕食を済ませ、学校の仕事に取りかかった。

~~~~~

和「12時か・・・今日はこれで休むとするか」

俺は布団に入り、意識を手放した。

和葉 サイドエンド

ゼ「私としたことが・・・またイレギュラーの進入を許してしまうとは。またあの3人に頼むか・・・しかし今回はかなりきついかもしれない。もう一人頼める奴を探すか・・・」

## 第一話 再会（前書き）

今回はあの3人の再会です。あと新キャラ登場です。ではどうぞ

## 第一話 再会

奏 サイド

奏「ん？・・・何だ？この感覚は？前にもこんな事があったような・・・」

？「久しぶりだな。紅 奏」

僕は声のする方を見ると顔立ちの整った一人の男性が立っていた。

奏「えつと・・・あなたは？」

？「今に分かる。『記憶再生』」

奏「っ！！い、いきなり頭痛が！？」

？「少しの間、我慢しろ。この『天界』での記憶を再生している」

五分後・・・

ゼ「気分はどうだ？」

奏「もう大丈夫です。お久しぶりです、ゼウスさん」

ゼ「2年ぶりか」

奏「・・・まさかとは思いますがここに呼ばれたと言つことは、もしかして・・・」

ゼ「お前の察している通りだ。またイレギュラーが現れた」

奏「もしかして和葉や恭二ではないですね？」

ゼ「いや、彼らではない。むしろ彼らにも協力を頼んだのだ」

奏「じゃあ二人はもういるのですか!？」

ゼ「ああ。・・・呼ぶか？」

奏「はい!」

ゼ「分かった。」

ゼウスさんが光の門を開くとそこから懐かしい友人が出てきた。その中に一人見慣れない人がいた

和「どうしたのですか?ゼウスさん」

恭「もう出発の時か？」

?「俺はもうちょっと修行したいよ」

奏「和葉!!--恭二!!--」

和「奏か!?!久しぶりだな!!--」

恭「かれこれ2年ぶりか。元気にしていたか？」

奏「うん、元気にしてたよ。・・・えつと。そっちの人は？」

ゼ「今回はお前達3人ではかなりきついと思ってな。もう一人協力を頼んだのだ」

修「始めて会っね。俺は『緑川<sup>みどりかわ</sup> 修也<sup>しゅうや</sup>』。君のことは和葉と恭二から聞いてるよ。これからよろしくな」

奏「よろしく。僕のことは『奏』って呼んで良いから、僕も君の事を『修也』って呼んで良いかな？」

修「もちろん。これからいつしよに戦う仲間なんだからね」

奏「ありがとう、修也」

僕と修也は握手を交わした。

ゼ「さて今回お前達にやってもらいことはあるアニメの歴史を修正してもらいたいのだ」

和「あるアニメとは？」

ゼ「『リリカルなのはStrikers』と言うアニメをしているか？」

奏「名前くらいなら聞いたことはあります」

恭「どういう内容かはあまりわからない」

修「俺もだよ」

ゼ「知らないか・・・まあ良い。そのアニメにイレギュラーが入り込みその歴史が激しく改ざんされた」

奏「どういう事ですか？」

ゼ「つまり『存在しなければならない人間が存在していない』ということになる」

和「つまり主人公などの重要人物が消されているということですか？」

ゼ「・・・まずはこれを見て欲しい」

ゼウスさんが僕たちに目の前に映像を出した。しかしその映像は・

一人の男が高笑い、多くのカプセル型の機械が一般人を次々とレーザーで貫いている映像だった。

和「こ、これは!?!」

恭「な、なんと!?!」

修「ひどい、ひどすぎる!?!」

奏「これが、これが人間のやることなんですか!?!」

恭「はっ!?!この機械を試してみる!?!」

和「ん？・・・これは！？」

修「まさか。『DG細胞』！？」

奏「・・・イレギュラーが持ち込んだのか！？」

和「ゼウスさん。このアニメはこんな内容ではないでしょう！？」

ゼ「もちろんだ。この時点でこの物語の重要人物が4人消されている。」

修「4人もですか！？」

ゼ「まず主人公の『高町なのは』そして親友の『フェイト・テスタロッサ・ハラオウン』『八神はやて』そして『ギンガ・ナカジマ』だ」

奏「じゃあ。この4人がいないからこのようなことに！？」

恭「何故この4人がいないのだ？」

ゼ「この物語に入る前に何らかの方法でやられたのだと思う」

和「つまり。俺たちでこの物語が始まる前に行き、この4人を救い、イレギュラーを止めて欲しいと言う訳ですか」

ゼ「その通りだ」

奏「僕はやりますよ。こんなこと許せるわけがありません！！」

和「俺もだ!!」

恭「命を軽はずみするものは私が引導を渡す!!」

修「俺も黙って見ているわけにはいかないね!!」

ゼ「引き受けてくれるか。感謝する。礼の印に戦う『力』を与えよう」

すると僕たちの体が輝き、収まると僕は黒色のブレスレットが、和葉は白いブレスレットが、恭二はクナイの形をしたネックレスが、修也は龍の形が掘られた指輪がついていた。そしてみんなの体つきが良くなっていた。

ゼ「それは『デバイス』と呼ばれるものだ。おまえたちの新たな力だ」

奏「どう扱うのですか？」

ゼ「『セットアップ』と言ってみろ」

和「分かりました。では」

四人「『『セットアップ!!』!!』!!」

するとそれぞれの装飾品が輝き始め、僕たちの体を覆った。そして光が収まると・・・

奏「なっ!!僕が『マスターガンダム』になってる!?!」

和「俺は『ゴッドガンダム』だと!？」

恭「私は『ガンダムシュピーゲル』か・・・」

修「俺は『ドラゴンガンダム』だね」

ゼ「頼む。この力でこの物語を正しきものにしてくれ!!」

四人「」「」「分かりました!!」「」「」

ゼ「ではまずはこの4人の救ってきてくれ。お前達はちょうど4人だから1人が1人の割り当てだ」

和「ではしばらくは俺たちは別行動だな」

恭「気を引き締めてかかるぞ」

修「俺だってまだ死にたくないもんね」

ゼ「あとお前達のデバイスは『殺傷設定』『非殺傷設定』に変える事ができるからな」

奏「つまり。『非殺傷設定』にしていると痛みだけで死に至ることはないと言ったことですか？」

ゼ「そう言うことだ。あと元の姿に戻るときは『モードリリース』と言えばいい」

和「分かりました」

ゼ「ではそれぞれの場所に転送させる。準備は良いか？」

4人「「「はい！！」」「」」

ゼ「では転送開始！！」

奏「みんな。またここで会おうね」

和「愚問だな」

恭「当然のことだ」

修「そう言う奏だつて油断しちゃだめだからね？」

奏「分かつてるよ。じゃあね」

僕たちはそれぞれの場所に転送された。

ゼ「頼んだぞ。みんな」

奏 サイドエンド

## 第一話 再会（後書き）

アカ「さてどうなるかな」

奏「誰が誰を助けに行くのか決めてるの？」

和「それを教えては意味がないと思うぞ？」

恭「まあ。順番だけを教えても私は良いと思うが？」

修「俺が新キャラだから当然俺からだよね」

アカ「まあ。順番はなのは、フェイト、はやて、ギンガの順番だよ」

修「まあ良いか。指摘があればよろしくお願いします」

## 第二話 白銀の世界で・・・（前書き）

今回はなのはとヴィータの会合です。誰が会うかは本文でどうぞ

## 第二話 白銀の世界で・・・

和葉 サイド

和「ん？・・・ここは」

俺が目を覚ますと周りは白銀の世界だった。しかし寒い・・・

？【なら体を動かして温めたらどうだ？】

和「ああ。そうする・・・っ！！誰だ？」

？【慌てるな。俺はここだ。お前の右腕だ】

俺は右腕のブレスレットを見ると宝石の部分が光って、言葉を発していた

和「その声は・・・ドモン師匠！？」

ド【ああ。久しぶりだな、カズハ】

和「はい。お久しぶりです。しかし何故師匠がデバイスに？」

ド【ゼウスから頼まれてな。お前をサポートして欲しいとのことだ】

和「ありがとうございます師匠」

ド【カズハ。俺のことは『ドモン』と呼べ。俺はまだ師匠と呼ばれるほど強くない】

和「しかし。師匠は俺に流派東方不敗の技を、そして武闘家のあり方教えて下さいました」

ド【俺は当たり前のことをしたまでだ。それに俺は『ドモン』と呼ばれているのになれているからな。

俺のことは『ドモン』と呼んでくれ。敬語も必要ない】

和「・・・分かった。ドモンがそう言うのなら」

ド【ふつ。感謝するぞ、カズハ」

和「しかしドモン。ここは一体どこだ？一面雪の世界だが・・・」

ド【恐らくここにあの消された4人の内の1人が居ると思うが】

和「なるほどな。ドモン。ここら一帯に生体反応はあるか調べてくれないか？」

ド【分かった。やってみよう・・・・・・・・っ！！カズハ！！】

和「どうした！？ドモン」

ド【ここから北に5キロ先に生体反応がある。2つが人間。50が『ガジェット』だ！！】

和「『ガジェット』？」

ド【あのカプセル型の殺人機械のことだ！！】

和「なんだと!？」

ド【しかも1人の人間の生体反応の段々弱くなってる!！」

和「っ!!まさかそいつが!？」

ド【恐らくお前が考えていることが正しいと思うぞ】

和「くそ!!ドモンその場所に行くぞ」

ド【待てカズハ!!その前にこのデバイスの名前をつける!】

和「???名前ならあるだろう?」

ド【それは俺自身の名前だ。このデバイスの名前は決めてないだろう?そうしなければデバイスが反応しない】

和「なるほどな。・・・よし!決めた。このデバイスの名前は『ゴッド』だ!！」

ド【名前承認。ネーム『ゴッド』。いつでも行けるぞカズハ!!】

和「行くぞ!！」

和・ド「【ゴッド!!セットアップ!!!】」

光が俺を包み、収まると俺はドモンの愛機『ゴッドガンダム』になった。

和「急ぐぞ!!ドモン!!」

ド【おうー!!】

俺は背中ofバーニアを吹かしてその場所へと向かった。

和葉 サイドエンド

ヴィータ サイド

ヴィ「なのは!!しっかりしろ!!なのは!!くそ・・・こいつら  
一体何なんだ!!」

な「ヴィ・・・ヴィータ・・・ちゃん・・・私の事は・・・良いか  
ら・・・逃げて?」

ヴィ「バカ野郎!!んなことできるか!!」

あたしたちがここでの任務を終えて帰ろうとすると、いきなりガジェットが襲つて来やがった!!しかもあたしたちが見たことがないタイプだった。あたしたちは応戦したが、なのはが日頃の疲れが出てしまったのか一瞬、動きを鈍らせてしまった。その隙をガジェットが見逃さなかった。あたしが気づいたときにはガジェットがなのはの体を貫いていた・・・

ヴィ「くそ!!どうするんだよ!?!」

あたしが混乱していると2、3体のガジェットがあたしとなのはに斬りかかってきた。

ヴィ（やられる!!）

あたしがそう思い目を閉じて覚悟を決めたそのとき・・・

？「伏せる！！」

ヴィ「え！？」

あたしはとっさに伏せるとあたしとなのはの上に何かが通り過ぎ、ガジェットが真つ二つになっていた。そして次にあたしの目に入ったのは体全体が機械の装甲を身につけ、手には桃色に輝く剣を握っていた魔導師だった。

？「大丈夫か？」

ヴィ「あ、あたしは大丈夫だ。けど、なのはが！！」

？「分かった。お前は少し離れている。こいつらは俺がやる」

ヴィ「わ、分かった。」

あたしはなのはを背負ってここから離れた。

ヴィータ サイドエンド

和葉 サイド

和「何とか間に合ってよかったな」

ド【気を抜くなよカズハ。たかが機械となめてかかるとやられるぞ！】

和「分かってる。では始めるか！！ガンダムファイト！！」

ド【レディー！！】

和・ド「【ゴー！！】」

俺は『ゴッド・スラッシュ』を構え、ガジェットの集団に斬りかかった。

ズバツ！！ ザシュ！！

和「所詮は機械だな。太刀筋が見え見えだ！！」

俺はガジェットの剣をすべて紙一重でかわし、次々と切り裂いた。

和葉 サイドエンド

ヴィータ サイド

ヴィ「すげえ・・・あいつ何もんだよ？」

あたしはなのはを安全な所に運び、助けてくれたあの魔導師の戦いを見ていた。

ヴィ「剣術はシグナムより上なんじゃねえか！？いくらシグナムでもあの数は無傷で戦えるのは無理だ！！・・・あ！！」

ガジェットが魔導師の周りを取り囲み、一斉に斬りかかった。これはやばいとあたしが助けに行こうとした瞬間、魔導師が『居合い』

の構えを取った。

ヴィ「何する気だ？」

？「ゴッド・スラッシュ・タイフーン！！！！」

ヴィ「っ！！」

魔導師が剣を抜き、すごい勢いで回転すると桃色の竜巻ができ、斬りかかったガジェットを一齐に切り裂いた。そしてその魔導師はガジェットが片づいたことを確認するとあたしたちの元に飛んできた。

？「すまない。少し時間がかかった」

ヴィ「てめえは一体、何もんだ！？」

？「今はそんなことを気にしている場合か？」

ヴィ「あ、そうだ！なのは！！」

ヴィータ サイドエンド

和葉 サイド

和「見せてみる」

俺は体を貫かれた白い服の少女の傷を見た

？「おい！どうなんだ！？」

もう1人の赤いゴスロリの服を着た少女が血相を変えて尋ねてきた。

和「離れている、ゴスロリ」

ヴィ「ゴスロリじゃねえ！！あたしは『ヴィータ』だ！！」

和「じゃあヴィータ。離れている。こいつを死なせたくは無いだろ  
う？お前は連絡を取れ！！」

ヴィ「わ、分かった」

和「さて。ゴッド。モードリリース」

俺は元の姿に戻り、傷ついた少女の傷口に右手を添えた。

ヴィ「連絡は取れたぞ・・・ってお前、何やってんだ！？」

和「俺はお前じゃない『白銀和葉』だ。今から傷をふさぐ、これ以上出血させないためにな」

ヴィ「そんなことがでいいのか！？」

和「見てろ・・・はああ！！」

俺は右手に『気』を集中させて、傷口を塞ぎ始めた。

和葉 サイドエンド

ヴィータ サイド

ヴィ（和葉ってやつが傷口を塞ぐって言うてが本当にできんのか？）

和「終わった・・・」

ヴィ「え！？」

あたしは慌ててなのはの傷口を見た。あの傷口が跡形もなく消えていた。

ヴィ「和葉。だったか？何をしたんだ！？」

和「ちょっとした秘伝の技だ。一命は取り留めたから病院でまた治療をすれば良い。」

ヴィ「じゃあ、なのはは助かるのか？」

和「ああ。だが、この子は立つことすらままならないかもしれない」

ヴィ「何だと！？」

和「傷があまりに深すぎだ。再び歩くようになるにはかなりのリハビリが必要だ」

ヴィ「そんな・・・」

和「では俺は消える。では・・・っ！！（しまった！！久しぶりに『気』を使ったから体が！！）」

ヴィ「え？っわあ！！」

和葉が立ち上がろうとするとあたしに倒れかかってきた。

ヴィ「お、おい！どうしたんだ！？」

あたしは和葉に呼びかけてみたが完全に気を失っていた。仕方ないから一緒につれて帰ることにした

ヴィー タ サイドエンド

### 第三話 会話（前書き）

今回は和葉となのはの会合です。ではどうぞ

### 第三話 会話

和葉 サイド

和「ん・・・ここは？」

ド【目が覚めたか、カズハ】

和「ドモン。ここはどこだ？そして俺はどうなったんだ？」

ド【ここは病院だ。お前は久しぶりに『気』を使っただから体に負担が大きかったと思う。気絶した後、お前はここに搬送されたんだ。二日間、眠っていたぞ】

和「そうか」

ド【これからどうするつもりだ？カズハ】

和「まずはゼウスさんと連絡をとる。人気のない場所に移動する必要がある」

ド【その前にお前に『念話』を覚えておく】

和「『念話』？」

ド《聞こえるか？カズハ》

和「な、何だ！？頭の中にドモンの声が！？」

ド「これが『念話』だ。話したい奴に意識を集中させ、頭の中に呼び掛けると話をするができる。試しにやってみる」

和「わ、分かった。《こんな感じで良いのか?》」

ド「おう。はつきりとお前の声が聞こえるぞ。これは他人から聞き取られることはないから安心しろ」

和「なるほどな。では移動するか」

俺はベッドから降り、近くにあった俺の私服に着替え、病室から出た。

ド【しかしどこで連絡をとるつもりだ?】

和「とりあえず外に出るぞ。屋上はやめておこう。あそこは人が集まりやすい。」

俺が病院の出入口を目指して歩き始めた、その時・・・

?「うう・・・ひつく・・・」

和「ん?ドモン。何かすすり泣きが聞こえなかったか?」

ド【確かに俺も聞こえた】

俺が声を頼りに鳴き声の正体を探した。すると一つの病室に茶髪でツインテールの少女が倒れていた。恐らくベッドから落ちてしまったのだろう。

和「（この娘は確か・・・あの時に助けた『高町なのは』だよな？）  
おい。大丈夫か！？」

な「グスツ・・・あ、はい。ベッドから落ちてしまっただけです  
から大丈夫です」

和「無理はするな！お前の体は動くことすら困難なはずだ。・・・  
悪いが少し我慢してもらうぞ」

な「え？・・・ふええ！？」

俺は『高町なのは』を優しく抱き上げ、ベッドに優しく下ろした。  
下ろした時に『高町なのは』の顔が赤くなっていた。何故だ？

和「すまないな。いきなり抱き上げたりして」

な「い、いえ。ありがとうございます／＼（にや）。いきなり抱  
き上げられたからビックリしたよ／＼／＼（」

和「そうか」

な「あの。もしかして『白銀和葉』さんですか？」

和「何故俺の名前を知っている？」

な「ヴィータちゃんが教えてくれたんです。銀髪の男の人が助けて  
くれたって」

和「あのゴスロリ少女から聞いたのか」

な「にやはは。ヴィータちゃんが聞いたら怒っちゃいますよ?」

和「まあ良い。改めて自己紹介をさせてくれ。俺は『白銀和葉』だ」

な「私は『高町なのは』です。『なのは』って呼んでください。和葉さん」

和「分かった。・・・なのは、君に聞きたいことがある」

な「何ですか?和葉さん」

和「君はこれからどうするつもりだ?その体では魔法使いを続けることは難しいぞ?」

な「っ!私、私は・・・」

和「・・・迷っているようだな。君が決めることを俺がとかく言うつもりは無いが、これだけは言わせてくれ」

な「何ですか?」

和「自分の信じた道を貫き通すこと。それが『生きる』と言うことだ!」

な「自分の信じた道を貫き通すこと・・・」

和「自分が本当にやりたいことを見つけ、信じ、貫き通す。それが『生きている』と言う証拠だ。それが出来ない奴は死人も同然だ」

な「・・・」

和「あ・・・すまない。難しかったか？」

な「いえ。和葉さんの言いたい事、何となくわかる気がします」

和「そうか」

な「本当は私はこんな体になっても魔導師に戻りたいです！・・・でも怖いんです」

和「・・・」

な「もしリハビリをやっても体が動かなかつたらと思うと不安になつて、怖くなつて・・・」

和「当たり前だ。不安にならない方がおかしい。だがお前は一人か？」

な「え？」

和「お前には信頼できる友達はいないのか？」

な「そ、そんな事ありません！！」

和「なら、その友達に頼れば良い。その友達が君の信頼に応えてくれるはずだ」

な「そ、そんなこと出来ませんよ！？」

和「何故だ？」

な「だって、フェイトちゃんや、はやてちゃんに迷惑をかけるなんて、そんなこと出来ませんよ?」

和「ふう。君は『優しい』という言葉をお違ひしていないか?」

な「え?」

和「それは優しさでも何でも無い、ただの我が儘だ。それが逆に友達を傷つけることになることもある。かつての俺がそうだったからな」

な「そんな・・・グスッ」

な「のはがまた泣き顔になり、うつむいてしまった。これは失敗だったか?」

和「そんなに落ち込むことはない、なのは。今からでも遅くはない」

な「・・・また私は飛べるんでしょうか?」

和「それは君次第だ。厳しいことを言っているかもしれないが、忘れるな。君は一人じゃない。そして『生きて』いる。だから可能性はゼロではない」

な「ヒック・・・グスッ・・・」

和「ずっと一人で辛かったな。よく頑張ったな、なのは」

な「うわあああああん」

和葉 サイドエンド

なのは サイド

私は和葉さんの暖かい胸の中で声を張り上げて泣きました。そしてだいぶ落ち着いて和葉さんから離れました。

和「落ち着いたか？なのは」

な「はい」

和「・・・どうするかは決まったか？」

な「はい。私はまた魔導師を目指します」

和「そうか（いい目になったな。これなら心配いらないな）」

な「あの。ありがとうございます、和葉さん。和葉さんが居なかったら私はあきらめていたかもしれません」

和「何。俺は助言をしたまでだ」

ド《カズハ！不味いことになった！》

和《ドモンか！？どうした？》

ド《お前が病室から居なくなったことがばれたみたいだ！》

和「《っ！！分かった。すぐにここから離れる》なのは、すまない。

俺は行かなくてはならない」

な「え！？行ってしまうんですか？」

和「少し訳ありでな、すまない。・・・ではな」

な「あ、あの！・・・また会えますか？」

和「君が会えると信じているなら、また何処かで会えるさ」

和葉さんは病室の窓を開けて、飛び降りました。そして次に見えたのは背中に六枚の羽をつけた『天使』でした。

な「また会えるかな？和葉さん」

は「なのはちゃん、おる？」

な「あ！はやてちゃん。それにフェイトちゃんも」

フェ「気分はどう？なのは」

な「うん。今は大丈夫だよ？・・・えっと、フェイトちゃん、はやてちゃん」

は「何？なのはちゃん」

な「私、また魔導師になりたい！だから一緒に頑張ってくれるかな？」

フェ「・・・当たり前だよ、なのは」

は「そうや。うちらは親友、そうやる?」

な「ありがとう。フェイトちゃん、はやてちゃん（和葉さんの言うてた通りだ。今度お礼を言わないと）えへへ」

フェ「どうしたの?なのは」

は「何か良いことでもあったん?」

な「う、うん。ちょっとね／＼」

は「・・・なのはちゃん。もしかして好きな人できたん?」

フェ「え!? そうなの?なのは!?!」

な「ち、違うよ／＼」

は「その割には顔、赤いで?」

な「そんなこと／＼・・・もう、はやてちゃんのいじわる!」

は・フェ「あはは」

な（でも私、本当に和葉さんの事・・・）

なのは サイドエンド

和葉 サイド

なのはと別れた後、俺は人気のない場所に移動した

和「ゼウスさん。聞こえますか？」

ゼ『ああ。どうした？』

和「なのはの救出は無事に終わりました。『天界』への転送をお願いします」

ゼ『了解した』

ゼウスさんとの通信が終わると、俺の前に光の門が現れた。俺はその門をくぐった

和葉 サイドエンド

### 第三話 会話（後書き）

アカ「お疲れ様。和葉」

和「たいしたことはやっていない」

奏「でも次は誰かな？」

恭「次はフェイトか？」

修「次こそ俺が出るぞー！！」

和「指摘があればよろしく頼む」

#### 第四話 閃光と忍者（前書き）

今回はフェイトとの会合です。誰が会うかはタイトル通りです。ではどうぞ（今回は、かなりグダグダです。申し訳ありません）

## 第四話 閃光と忍者

恭二 サイド

？【起きろ！いつまでそうしているつもりだ！？】

恭「ん？」

私は何処からか声が聞こえ、その声で目を覚ました。

恭「・・・声はすれど姿が見えないが？」

？【バカ者！私はここだ！】

私は首に掛かっているネックレスを見ると宝石の部分が輝き、声を発してした

恭「その声はシュバルツか！？」

シュ【如何にも。私は『シュバルツ・ブルーダー』だ。久しぶりだな、恭二】

恭「シュバルツ。すまない。私はお前の力をとんでもないことに使ってしまった」

シュ【そのことはもう良い。それよりもお前にはやるべきことがあるのではないか？】

恭「ありがとう、シュバルツ。しかし何故シュバルツがデバイスに

いるのだ？」

シュ【お前をサポートするように頼まれたのだ】

恭「そうか。しかし、ここはどこだ？周りには木々しか立っていないのだが・・・」

私が居る場所は恐らく何処かの森林の中らしい。

シュ【あくまで私の推測だが、ここは何処かに居なくなった4人の一人がいると思うぞ？】

恭「そう考えるのが妥当だな。シュバルツ、周りに人間の反応が無いか調べることができるか？」

シュ【承知した。・・・あつたぞ！恭二！】

恭「どこだ！？シュバルツ」

シュ【ここから西に10キロ先に人間の反応がある。数は20だ！】

恭「分かった！今からそこに向かうぞ！！」

シュ【恭二！その前にこのデバイスの名前をつける！】

恭「このデバイスの名前は決まっていないのか？」

シュ【『シュバルツ』は私自身の名前だ。このデバイスの名前ではない。お前が名前を決めない限りはデバイスを起動させることはできんー！】

恭「・・・ならば。このデバイスの名前は『シュピーゲル』だ!」

シュ【名前承認。ネーム『シュピーゲル』。良いぞ恭二】

恭「行くぞ!シュバルツ!」

恭・シュ「【シュピーゲル!!セツトアップ!!】」

私とシュバルツが叫ぶと、光が私を纏い、それが収まるとシュバルツの愛機『ガンダムシュピーゲル』になった。

シュ【恭二!あとお前に『念話』を覚えておく】

恭「『念話』とは何だ?」

シュ《聞こえるか?恭二》

恭「うっ!!頭の中にシュバルツの声が!」

シュ《これが『念話』だ。驚くのは無理もない。話したい相手に意識を集中させ、頭の中に呼びかけると会話を行うことができる。試しにやってみるが良い》

恭「分かった。・・・《こうで良いのか?シュバルツ》」

シュ《うむ。お前の声を聞き取ることができたぞ。この会話は外にもれることはない。安心して良いぞ?》

恭《便利なものだな。では急ぐか!シュバルツ!。あと気配で気づ

かれないようにするために残り一キロあたりになつたら教えてくれ」

シュ《承知した》

私は目的地に急いだ。

~~~~~

シュ《恭二。ここが残り一キロの地点だ》

恭《承知した》

私は気配を殺し、物音をあまり立てずに進んだ。すると男が4、5人倒れていた。得に目立った外傷も無く気絶していた。そして黄色の輪が男達の動きを封じているようだった

恭《シュバルツ。この輪は一体何だ？》

シュ《これは『バインド』と呼ばれる拘束魔法の一つだ。ここらで戦闘があつたことは間違いない》

恭《私もそう思う。急ぐぞ！》

恭二 サイドエンド

フェイト サイド

フェ「くっ！！エリオを離せ！！」

ボ「何でわざわざ捕まえたお前を釣る『エサ』を離さないといけな

いんだ？」

エ「フェイトさん！！僕のことは良いですから逃げてください！！」

フェ「どうして？どうしてこんなことを！？」

ボ「お前の絶望する顔が見たいからさ。ここにいる奴らはみんなそうだ」

フェ「くっ！！バルディッシュュ！！」

バ【ハーケン・フォルム】

ボ「おっと！！抵抗するなら、こいつの首が一瞬で吹っ飛ぶぞ？おい！！」

「了解、ボス」

フェ「これは『バインド』！！」

私は『バインド』に拘束され、動けなくなってしまった。

ボ「ふっ。そこでおとなしくしていれば良いさ」

フェ「私は貴様達に恨まれるようなことは何もやっていない！！」

ボ「お前になくても俺たちにはあるんだよ！！・・・お前のような人によって作られた存在が執務官だと？俺たちを差し置いて調子に乗ってんじゃねえよ！！！！」

「おい・・・もうおしゃべりはここまでにしてさっさとこのガキを殺そうぜ?」

「そうだぜ。俺たちを散々苦しめてきたこの女の絶望が見たいぜ」

ボ「そうだな。おい・・・このガキを殺れ」

「了解だ、ボス。・・・死ねええ!!」

フエ「やめてーーーー!!」

1人の男が剣を振りかぶり、エリオに斬りかかった。私は叫ぶことしかできなかった

ザシュツ!!

と音が聞こえた。私はエリオが斬られたと思い込み涙を流した。けど・・・

「ぐわああああ!!!!」

フエ「え!?!」

私はよく見てみると、エリオに斬りかかった男の両手に飛び道具『クナイ』が刺さっていた。血は出ていないから恐らく『非殺傷』にしていると思った。

ボ「な、何だ!?!」

「分かんねえ。一体誰が・・・グハツ!!」

今度はエリオを捕まえていた男が悲鳴を上げて気絶した。

「な、何がどうなってんだ！？・・・ギャア！！」

「な、何がいるんだよ！？・・・グハツ！！」

男達が突然のことにパニックを起こしている間にも男達はひとり、またひとりと気絶していった。そしてとうとうボスと呼ばれる男だけになった

フェ「エリオ！！早くこっちに！！」

ボ「行かせるか！！撃ち殺してやる！！」

ボスがデバイスの銃を構えて、エリオに向けて撃った。

ドゴーン

とエリオに当たり、煙が巻き上がった。

フェ「エ、エリオーーーー！！！！」

ボ「はっははは！！何故仲間が気絶したかは分からないが、ガキを撃ち殺してやったぜ！！ざまーみやがれ！！」

ボスが高笑い、私は怒りと悲しみで溢れていた。けど・・・

？「ふつ。相手の状態も確認せずに勝利を確信するとはな・・・」

フエ「え！？」

ボ「何！？」

煙が晴れると、一枚のぼろぼろになった黒い『畳』があつた。そしてその畳が壊れると体を黒いの装甲で纏っている魔導師と無傷のエリオがいた。

？「少年。安心して目をあけてみる」

エ「え？・・・えっと。貴方は？」

恭「私か？私は『黒原恭二』。覚えておいてもらおう」

エ「恭二さん・・・」

恭「少年。もう大丈夫だ。早く彼女の元へ行け！！」

エ「あ、はい！！・・・グスッ・・・フエイトさん！！」

フエ「エリオ！！・・・良かった。本当に良かった！！」

ボ「くそ！！なら2人まとめて殺してやる！！」

ボスが再び銃を構え、私たちに魔力弾を放った。でも・・・

ザシュッ！！

と黒原恭二さんがトンファー型ブレイドで魔力弾を切り裂いた。

ボ「くそ！！何で邪魔をするんだ！？」

恭「私は命を軽はずみしている者を許すわけにはいかないからな！！」

ボ「・・・へ！！この女とこのガキがどんな生まれ方をしたのかでめえは知ってんのか？」

恭「何だと？」

ボ「こいつらはな、人の手によって作られた『人造魔導師』なんだよー！！」

恭「『人造魔導師』だと！？つまり『クローン』みたいなものか？」

ボ「そうだ。そしてこいつらは家族や関係者から見捨てられた『出来損ない』なんだよー！！」

フェ「ち、違うー！！」

ボ「違わねえな！！てめえは母親から作られた割にはすぐに見捨てられたじゃねえか！？それが『出来損ない』って言わずになんて言うんだよー！？」

フェ「わ、私は・・・」

ボ「誰もてめえらを認めやしねえ！！てめえらみたいな『化け物』は一生地面を這いつくばっていれば良いんだよー！！」

私は事実ばかりを言いつけられ答えることができなかった。エリオ

も私にしがみつきのながらも嗚咽を出していた。私は言い返すことが出来なくて悔しかった、そして涙を流した・・・

恭「・・・戯れ言はそれだけか？」

ボ「何？」

恭「戯れ言はそれだけかと聞いたのだ！！彼女や少年が『人造魔導師』？・・・それがどうした！？生まれた方はどうであつても彼女や少年は一人の『人間』だ。『化け物』や『出来損ない』などではない！！」

ボ「なっ！！貴様は何とも思わないのか！？」

恭「知ったことか。それにこの二人は今でも苦しんでいるはずだ。そんな中、懸命に生を歩んでいる。貴様みたいな奴が・・・いや！誰もが二人の生を邪魔する権利はない！！・・・もしこれ以上やるというなら・・・！！」

恭二さんはまたトンファー型ブレードを交差させて、身構えた。

ボ「な、何を！？」

恭「私がここで引導を渡してくれるー！！」

その瞬間、恭二さんが消えた・・・

ズバシュッ！！！！

ボ「グ・・・ア・・・」

とボスが軽い悲鳴を上げて、ゆっくりと倒れ伏した。

恭「ふん！他愛のない」

フェ「あ、あのー！」

恭「む？そう言えば大丈夫だったか？今その輪を斬るから待っていろ」

私はようやく『バインド』から解放された。

フェ「ありがとうございます。あなたが居なかったらどうなっていたか・・・」

恭「何。私は当たり前のことをやったまでだ。・・・紹介が遅れた。私は『黒原恭二』だ」

装甲が解除されると、黒髪の顔立ちが整った男性が私に自己紹介をしてきた。

フェ「私は時空管理局執務官フェイト・テストロッサ・ハラオウンです」

エ「僕はエリオ・モンディアルです。助けてくれてありがとうございます。恭二さん」

恭「何がともあれ無事で良かった」

フェ「あの。恭二さん」

恭「敬語は必要ない。気軽に『恭二』と呼んでくれ。私も君たちのことを『フェイト』と『エリオ』と呼ばせて貰おう」

フェ「・・・分かった。恭二がそう言うのなら」

恭「感謝する、フェイト」

エ「えっと。恭二さん」

恭「どうした？エリオ」

エ「恭二さんは僕たちのことが怖くないんですか？」

恭「何故お前達を怖がる必要があるのだ？」

フェ「さっき、あの男が言ってたように私とエリオは『人造魔導師』で普通の人間じゃない。だから・・・」

恭「それがどうした？フェイトはフェイト。エリオはエリオだ。生まれ方がどうであれ二人は立派な『人間』だ。それに変わりはない」

フェ「あ・・・」

嬉しかった。なのはや、はやて以外に私たちのことを認めてくれた人が居たことに。

エ「あの！恭二さん！どうしたらそんな強くなれるのですか？」

恭「修行を積むことが大切だが、もう1つ大切なことがある」

エ「それは何ですか？」

恭「『信じる』ことだ」

エ「信じること？」

恭「自分を信じ、仲間を信じる。これもまた強くなるために必要なことだと私は考える。仲間を信じればその信頼に仲間も応えてくれるはず」

フェ「その考え。私にも分かる気がする」

恭「これは私の師匠の言葉なのだが。『人を信じる心があれば恐れるものは何もない！』』と言い聞かされてきた。」

エ「・・・ちよつと難しいです」

恭「ふはは。君にはまだ時間はある。その言葉の意味を少しずつ理解して行けば良い」

エ「はい！ありがとうございます、恭二さん」

恭「ふつ。では失礼する」

フェ「待つて！恭二！！」

恭「まだ何かあるのか？」

フェ「また、会えるよね？」

恭「君が会えると『信じて』いるならきつと会える。私はそう『信じてる』。では、さらばだ」

シュン・・・

と恭二は消えるように居なくなった。

エ「何か不思議な人でしたね？フェイトさん」

フェ「うん。そうだね、エリオ。（でも恭二、格好良かった）／／」

エ「フェイトさん？」

フ「っ！！何でもないよ、エリオ。じゃあ家に帰ろうか？」

エ「はい！」

私とエリオは手をつないでゆっくり家に戻った。また恭二と会えることを信じて・・・

フェイト サイドエンド

恭二 サイド

フェイトたちと別れた後、私は人目のつかない場所に移動した。

恭「ふう・・・」

シュ【どうしたのだ？恭二】

恭「いや。フエイトの事でな」

シュ【心配か？彼女が」

恭「そう言う意味ではないが」

シュ【・・・まさかとは思うが惚れたのか？】

恭「なっ！？／／／」

シュ【図星か。何故彼女に惚れたのだ？】

恭「あの長い金髪もそうだが、何より他人を想うあの心に惹かれたと思う」

シュ【そうか。まあ応援ぐらいはしてやる】

恭「ありがとう、シュバルツ」

その後私はゼウスさんと連絡を取り、『天界』に帰った。

恭二 サイドエンド

第四話 閃光と忍者（後書き）

奏「恭二はフェイトか」

和「しかも惚れて帰ってくるとはな」

恭「／／／」

修「次は誰かな？」

ア力「指摘と感想。よろしくお願いします。」

第五話 夜天の主と龍（前書き）

今回ははやての会合です。誰が会つかはもう分かりますね？ではどうぞ

第五話 夜天の主と龍

修也 サイド

？【起きて！修也】

修「ん？」

目を覚ますと俺は何処かの公園のベンチで寝ていたみたいだ。

修「あれ？今『サイ・サイシー』の声が聞こえたと思ったけど俺の気のせいかな？」

サ【気のせいじゃないよ！オイラはここだよ！】

よく見てみると右手につけた指輪の龍が刻まれた宝石が光り、言葉を喋っていた。因みにサイ・サイシーは『少林寺拳法』を教えてくれた俺の師匠だ。俺は今22歳で、サイ・サイシーは16歳だった。年下に習ってどうするんだよって思った人！！後で『真流星胡蝶剣』を喰らわせてあげるから覚悟しておいてね？サイ・サイシーは16歳だけど少林寺の中で最も強いってゼウスさんから聞いていたから頼んだんだよ。

修「サイ・サイシー？何で君がデバイスに？」

サ【ゼウスの兄貴に頼まれたからさ。修也のまだまだ一人前じゃないからね】

修「厳しいね・・・相変わらず」

サ【気にしない気にしない。修也。まずはこのデバイスの名前を決めてよ】

修「え？このデバイスの名前は『サイ・サイシー』じゃないの？」

サ【それはオイラの名前！！このデバイスはまだ名前がないから決めておかないと敵と戦う時にデバイスが反応してくれないよ？】

修「なるほどね。じゃあ名前はドラゴンガンダムから取って『ドラゴン』にするよー！」

サ【名前承認。ネーム『ドラゴン』。これでいつでもデバイスを起動させることができるよ】

修「ありがとう、サイ・サイシー」

サ【あと『念話』を覚えておくからね】

修「『念話』？」

サ《聞こえる？修也》

修「うお！？頭の中にサイ・サイシーの声が！？」

サ《これが『念話』だよ。話したい相手に意識を集中させ、頭の中に呼びかけると会話をすることができるよ》

修《・・・こんな感じか？サイ・サイシー》

サ「聞こえるよ修也。初めてにしては良くできてるよ。あとこの会話はオイラたち以外に聞き取られることはないよ」

修「本当に何でもありだね、魔法って」

俺たちが念話で会話をしていると、周りが急に暗くなった。

修「っ！？サイ・サイシー。これは！？」

サ「これは『結界』だね。恐らくこの近くに魔導師がいることは間違いないよ」

修「なるほどね。・・・ん？誰か公園に入ってきた。」

俺は木の上に上り、身を潜め、その入ってきた人を見ると、茶髪で学校の制服を着た女の子だった。でもその制服の至る所に傷が入っていた

修「サイ・サイシー。あの娘は魔導師かな？」

サ「そう考えるのが妥当かもね。普通『結界』の中に一般人が自分から入ることはできないからね。例外としては『結界』の中にたまに入っていることかな。」

修「なるほどね。でもどうして服に傷が？しかもあの傷は何かに斬られたような傷だ」

サ「ん？修也！！あのお姉ちゃん他に『結界』の中に人間の反応が2つある！！」

修《何！？》

俺が再び見ると、大剣を構えた男と、双銃を構えた女が女の子に敵対していた

修也 サイドエンド

はやて サイド

は「なんなんや！？あんたらは」

男「今から死に行く者に名乗る名前はない！！」

女「大人しく我々に殺されろ！！」

は「うちはあんたらに恨まれるようなことしてないで！？（こんな時に『シユベルトクロイツ』を忘れるなんて）」

男「お前に無くても私たちにはある！！」

女「私たちの一族はお前の持つ『夜天の書』によって壊滅したのだ！！」

は「なんやて！？」

男「私たちは二人は命からがら生き延びることができた・・・」

女「お前に恨みはないが『夜天の書』によって死んでしまったものたちを報いるためにも貴様の命を貰う！！」

は「っ！！（デバイスは無くても魔力弾くらいなら！！）シュート！！」

うちは4、5発の魔力弾を二人に撃った、でも女の双銃が軽々と打ち落としてもうて、うちはその弾を受けてしもうた

は「くっ！！まだや！！・・・っ！！なんで魔力弾が撃てんのや！！？」

女「今お前に撃つたのは『バンパイア・バレット』。相手の魔力を吸い尽くす特殊弾だ」

は「そんな・・・」

男「これで終わらせてもらっ・・・夜天の主よ。安らかに眠れ！！」

男が大剣を振りかざし、うちに振り下ろした。うちは覚悟を決め、目を閉じた。

は（ごめん。ヴィータ・シグナム・シャマル・ザフィーラ・なのはちゃん・フェイトちゃん・・・）

ガキン！！

？「あきらめるのはまだ早いと思うよ？」

は「え？」

うかが目を開けると、体を緑と白の機械の装甲で身につけた男の人が、長い棒で大剣を防いでいた

はやて サイドエンド

修也 サイド

修《ふう。間に合って良かった》

サ《修也も目立つ登場するもんだねえ》

修《サイ・サイシーに言われたくないよ》

男「貴様！何故邪魔をした！？」

修「別に・・・ただの気まぐれかな」

女「じゃあ邪魔をするな！！」

修「それは出来ないね。あんた達間違ってるから・・・」

男・女「何？」

修「確かにあんたたちの一族は『夜天の書』って奴が滅ぼしたのかもしれない。でもそれって彼女が望んだからなの？」

男「それは違う・・・」

修「なら何故彼女を狙う！？」

女「その書の今の主が彼女だからだ」

修「そんな勝手な理由で彼女に命を奪おうとしていたのか!？」

男「どう言われようと・・・失った家族の無念を晴らすためなら私たちは鬼になる!！」

修「戦いをやめるつもりはないみたいだね。じゃあ俺が相手をしてやる!・・・悪いけどしばらく離れててもらえるかな？」

は「あ、はい。あと気いつけて下さい!!。あの女の弾は魔力を吸い尽くします!！」

修「分かった。じゃあまずは女をやるのが一番だね」

サ「これが修也の初めての実戦だね。気を抜くなよ!？」

修「当たり前のことを聞かないで?サイ・サイシー」

女「まずは貴様の魔力を貰う!!喰らえ『バンパイア・バレット』!！」

俺は女の魔力弾をかわして、両腕の『ドラゴン・クロー』を一斉に女に向けて伸ばした

女「なっ!?!腕が伸びた!?!・・・くっ!！」

女は『ドラゴン・クロー』をしゃがんでかわした。

修「ここだ!!『ドラゴン・ファイア』!！」

俺はクローの先端の龍の口に内蔵されている火炎放射器を女に向け

て放った。

女「今度は炎だと!？」

女はバリアを張り、炎を防いだ。けどこの時間が真の狙いだった

修「まだだ。はいあっ!!」

俺は女の周りに『フェイロン・フラッグ』を投合して突き立てた

女「こ、これは!？」

修「喰らえ!! 『宝華教典・十絶陣』!!!」

俺は『フェイロン・フラッグ』に火炎放射器の炎を引火させて、巨大な火柱を作り、女を焼き尽くした。

もちろん『非殺傷』にしているから死ぬことはないけど、女は気絶していた

修「あとはあんただけだよ？」

男「どうやらお前の力を見くびっていたようだな」

修「悪いけど速攻で終わらせてもらうよ? はいあ!!」

俺は男に『フェイロン・フラッグ』を投合して突き立てた。

男「私に同じ技が通用すると思うな!!」

男は『フェイロン・フラッグ』を大剣でなぎ払った。俺の真実の狙

いはこの隙だった

修「そんなこと。初めから思っていないよ!!」

男「何!？」

俺は『フェイロン・フラッグ』を投合したあと、男がフラッグに気を取られている内に、男の真上に瞬時に移動していた。

修「これで終わりだ!!『宝華教典・五火七令羽旗』!!」

俺は『フェイロン・フラッグ』で男を思いっきり殴った。

男「グハッ!!」

男は吹き飛び、倒れた。

男「まさかこれ程とは!!」

修「そんな心で俺を倒そうなんて無理だろ？」

男「確かに。今回は引かせてもらっ

修「ご自由に・・・あと一つ良いですか？」

男「？」

修「復讐をやっても失った物は帰ってきませんよ？」

男「・・・」

男は女を背負うと姿を消した。そのついでに『結界』も無くなって
いた

修「ふう。一件落着と・・・」

は「あ、あの」

修「ん？」

は「助けてくれて、ありがとうございます」

修「気にすることはないよ。あ、そう言えば自己紹介がまだだった
ね」

俺は元の姿に戻り、自己紹介を始めた。

修「俺は『緑川修也』。よろしくな」

は「修也さんですね。うちは『八神はやて』言います」

修「『はやて』か。良い名前だね」

は「あ、ありがとうございます」

修「俺のことは『修也』って呼んでいいよ。敬語もいらない」

は「ほんなら、うちのこと『はやて』って呼んでくれへんかな？
修也君」

修「分かった、はやて」

は「ありがとな、修也君」

修「じゃあ俺はここで失礼するね」

は「あ！ちよつと待ってえな。うち、まだお礼やつとらん！」

修「大丈夫だよ、はやて。気遣いだけでうれ・・・」

ぐうー・・・

修「あ・・・」

は「もしかしてお腹すいとるん？」

修「あはは。恥ずかしながら」

は「じゃあうちの家に来てくれへん？ご馳走作つたるさかい」

修「・・・じゃあ。ご馳走になろうかな。あとはやて・・・」

俺は上着をはやてに差し出した

は「どうしたん？修也君」

修「えつと。君の服かなり破けてるからこれを着て？／／／」

は「あ・・・／／／」

修也 サイドエンド

第五話 夜天の主と龍（後書き）

ア力「今回の雑談はお休みます」

奏「指摘と感想。よろしくお願いします」

第六話 修也の實力？

修也 サイド

修「ここがはやての家か・・・はやてって何人家族なの？」

は「うちは、ヴィータ・シグナム・シャル・ザフィーラ。そしてうちの五人家族や」

修「なるほどね。でも俺がいきなりお邪魔して良いのかな？」

は「今、家にはシャルしかおらんねん。他のみんなは今日は帰ってこんのや。修也君のことは念話でシャルに伝えておいたから安心してええで？」

修「用意が良いね、はやて」

は「さあ、入って？」

修「では、お邪魔します」

俺が玄関から入ると金髪の女の人が出迎えてくれた。

？「いらっしやい、修也さん」

修「はやて。この人が？」

は「せや。うちの家族で『シャル』や」

シャ「初めまして、修也さん。私がシャマルです。はやてちゃんから話は聞いています。はやてちゃんを助けてくれてありがとうございます」

修「いえいえ。たまたま通りかかっただけですから。後、はやての魔力が吸いとられてしまったみたいなので回復の方はよろしくお願いします」

シャ「分かりました。はやてちゃん、ちょっと来てくれる？」

は「ほんなら修也君はリビングで待っててな？」

修「分かった。じゃあ、お邪魔します」

俺はリビングに入り、ソファーに腰を下ろした。

修《でもじっと待っているって何かじれったいな》

サ《じゃあ料理でも作る？》

因みに俺の実家は『中華料理屋』で、あらかたの中華料理は作りきる。さらにサイ・サイシーも指摘してくれたから、かなりの自信がある。

修《でも勝手に台所と食材を使ったりしたら、二人とも怒ると思うよ？》

サ《じゃあシャマルお姉ちゃんに聞いてみる？念話で・・・》

修《何ではやてに聞かないの？》

サ《はやてお姉ちゃんに聞いたら絶対に『うちが作る』って言うと思うからね》

修《なるほどね。・・・シャルさん、聞こえますか？》

シャ《修也さん？どうしました？》

修《えっと。台所と食材をお借りしてもよろしいでしょうか？俺が夕食を作りますから。はやてに無茶はしてほしくありませんから》

シャ《・・・じゃあお願いしようかしら。修也さんはお客さんなのに、ごめんなさいね》

修《いえいえ。これは俺が望んでやることなんですから、気にしないで下さい。あと、はやてには内緒にしておいてくれませんか？》

シャ《分かったわ。じゃあよろしくね？》

俺はシャルさんとの念話を切ると台所へ移動して、食材を確め、料理を作り始めた。

修也 サイドエンド

はやて サイド

シャ「はい。これでもう大丈夫よ、はやてちゃん」

は「ありがとうな、シャル」

うちがシャルに魔力を回復してもらうのにかなり時間がかかってしまった。さあ、いまから夕食を作るで!!

は「ん?何か良い匂いがする・・・」

うちがリビングに入ろうとすると良い匂いがしてきた。もしかして・
・

修「あ、はやて。もう大丈夫なの?」

は「修也君。もしかして料理してるん!?」

修「うん。やっぱり、はやてに無茶はしてほしくないからね(笑顔)」

は「あ、ありがとう、修也君／＼」

修「もうすぐ出来るからシャルさんと一緒に待っててもらえるかな?」

は「でも何か、うちに手伝えることある?」

修「じゃあお皿とお箸を準備してもらえるかな?何処にあるか俺は分からないから」

は「まかしときい」

五分後・・・

は「す、すごいね。修也君」

シャ「これ。みんな修也さんが作ったんですか!？」

今、テーブルにある料理は『八宝菜』・『チンジャオ・ロース青椒肉絲』・『麻婆豆腐
(マーボー豆腐)』だった。

修「うん。さあ冷めない内に早く食べてよ。中華料理は出来立てが一番美味しいからね」

は「ほな。席につこうか？」

シャ「そうね」

修「では!」

三人「いただきます」

パクツ・・・

修「どうかな?はやて、シャマルさん」

は「美味しい・・・すごい美味しいで!!修也君!!」

シャ「はい。とても美味しいです。レシピを教えてくださいくらいです。」

は「あ!うちにも教えてほしい!!」

修「じゃあ食事が終わった後に教えてあげるから今は食事を楽しもう?」

その後、こちらは修也君から中華料理のレシピを教わって、楽しい時間を過ごした。でもシャルがちゃんと出来るか心配やわ・・・

はやて サイドエンド

修也 サイド

修「あ！もうこんな時間か。じゃあ俺はそろそろ、おいとまするね？」

時間はもう10時を迎えようとしていた。俺もあまり長居する訳にはいけないからね

は「あ。そうなん？できれば泊まって行って欲しかったんやけど・・・」

修「ごめんね？はやて。俺は明日、ちょっとした用事があるからね」

は「もう会えんの？」

修「また会えるってはやてが思っているなら、また会えるよ」

は「そうやね。じゃあ家の門まで見送るね」

シャ「じゃあ私もお見送りしますね」

俺とはやてとシャルは家の門まで移動した

修「ではお世話になりました。はやて、シャルさん、また会いま

しょう」

は「また会おうな？修也君」

シャ「こちらこそ美味しい料理、ごちそうさまでした」

修「では、失礼しますね」

俺は人気のない場所を目指した。そして『天界』に移動した

修也 サイドエンド

シャ「いい人だったわね？はやてちゃん」

は「ほんま・・・」

シャ「もしかしてはやてちゃん。惚れちゃった？」

は「そ、そ、そんなわけ・・・／／／」

シャ「うふふ。頑張ってたね？はやてちゃん」

は「／／／」

第六話 修也の実力？（後書き）

ア力「お疲れ。修也」

和「お前は料理が得意だったのか」

恭「一度食べてみたいな」

修「まあね。あとはギンガか。」

奏「残っているのは僕だね」

ア力「指摘と感想。よろしくお願いします」

第七話 灼熱の場所での出会い（前書き）

今回はラストでギンガです。誰が会うかはもう言いません。ではどうぞ

第七話 灼熱の場所での出会い

奏 サイド

？【起きろ！カナデよ！このままではお前は死ぬぞー！】

奏「え？・・・うわあー！！火事だー！！」

僕が目覚めると、周りが大火事を起こしていた。

？【慌てるでないー！！】

奏「え？・・・そう言えばどこからか声が？」

？【今はそんなことを言っている場合ではないー！！そのシエルターに移動しろー！！そこなら安全だー！！】

奏「あ！はいー！！」

僕は急いでシエルターの中に入り込んだ

奏「ふう。いきなりこんな所に出るなんて・・・あ。そう言えばさっきの声は何だったんだろう？」

？【お前はかつての師匠の声も忘れたのか？】

僕は紺色のブレスレットを見ると宝石の部分が光り、声を発していた

奏「そ、その声は、師匠！？」

声の主は僕に流派東方不敗を教えて下さった。『東方不敗マスターアジア』だった。

不敗【ふつ。久しぶりだな、カナデよ】

奏「し、師匠・・・お会いしとうございました!!」

不敗【カナデよ。何故涙する?】

奏「グスツ・・・失礼しました、師匠」

不敗【まあ良い。カナデよ、お前はまずやらねばならぬ事がある】

奏「居なくなつた4人の1人を助けることではないのですか?」

不敗【それもあるが、その前にこのデバイスの名前を決めよ!!】

奏「このデバイスに名前は必要なんですか?」

不敗【お前が名前を決めぬ限り、お前は力を発揮することはできません!!】

奏「そうですか。・・・ではこのデバイスの名前は『マスター』にします!!」

不敗【名前承認。ネーム『マスター』。これでお前は何時でも起動させることができるぞ。あとお前に『念話』を教えておこつ】

奏「『念話』って何ですか?」

不敗《聞こえるか？カナデよ》

奏「え！？頭の中に師匠の声が！？」

不敗《これが『念話』だ。話したいと思う者に意識を集中させ、頭の中に呼びかけると会話をすることができる。試しにやってみるが
良い》

奏「分かりました。・・・《師匠。これで良いのですか？》

不敗《うむ。よく聞こえるぞ。この会話は外に漏れることはない。
安心するが良い》

奏《便利ですね、魔法って。でもこんなとこに居るんですか？消えた人間の1人が》

不敗《ふむ。今からここに人間の反応があるか調べてみるか。少しだけ待て、カナデよ》

奏《分かりました、師匠》

不敗《・・・ふむ。ここはどうやら空港のようだ。人間の反応だが、わしたち以外に二つあるようだ》

奏《ではその内の一つが消された人間ということですか？》

不敗《そう考えるのが妥当じゃろう。・・・行くか？カナデよ》

奏《はい！・・・行きますよ？師匠！！》

不敗「わしは何時でも構わん!!」

奏・不敗「【マスター!!セツトアップ!!!】」

紺色の光が僕を纏い、収まると師匠の愛機『マスターガンダム』になった。

奏「反応が一番近い人間から救出しましょう」

不敗「【ならばこの階だな。急ぐぞ!カナデよ!!!】」

奏「分かりました!!」

僕は背中ofバーニアを吹かして移動した。

奏 サイドエンド

ギンガ サイド

ギ「スバル?どこ?」

私は妹のスバルを探しに空港の中に飛び込みましたが、どこに居るのか全く分からなくなり、私まで迷子になってしまいました。

ガラガラ!!

ギ「キャッ!!でもスバルはもっと恐い思いをしているはずだから急がないと!!スバルー」

ピシッ・・・

でもわたしは気づいていませんでした。床にヒビが入り始めていることに・・・

ピシピシ・・・

ギ「え？」

ピシッ・・・バキバキバキ！！

ギ「きゃあああ！！！！」

床のヒビが完全に崩壊して、私はすごい勢いで落ちてしまいました

ギ（私。ここで死ぬの？）

そして地面とぶつかる瞬間、私は目を閉じました。しかし、何時になっても痛みは来ませんでした。むしろ浮いている感覚でした。

？「ふう。何とか間に合った。ケガはない？」

ギ「え？」

私が目を開けてみると、体を黒色の装甲で纏っている機械人が私をお姫様抱っこで抱きかかえていました

。そして、ゆっくり地面に降り立ち、私を下ろしてくれました

ギ「・・・機械？」

？「残念ながら僕は機械じゃないよ？」

すると頭の部分が光り、目に入っただのは茶髪で顔立ちの整った男性の顔でした

ギ「ご、ごめんなさい！助けにくさったのに、私、変な事を・・・」

奏「大丈夫だよ。気にしないで？自己紹介がまだだったね。僕は『紅奏』。君は？」

ギ「奏さんですね。私は『ギンガ・ナカジマ』です」

奏「（ゼウスさんが言っていた。消された4人の一人だね）。ギンガって言うんだね。どうしてこんな危ない所に？」

ギ「妹のスバルがまだこのどこかにいるはずなんです。それで居ても立つてもいられなくなって・・・」

奏「妹思いなんだね。ギンガは」

ギ「はい。私の大切な妹です」

奏「じゃあ僕も一緒に探してあげるね。あと口をこれで押さえて？」

奏さんは私にハンドタオルを手渡してくれました。

奏「この煙を吸うと体に悪いからね」

ギ「分かりました」

奏「師匠。残りの人間の反応は？」

不敗「この階だ。お前達はさっき上から落ちてきたであろう？」

奏「分かりました」じゃあギンガ。歩ける？」

ギ「はい。歩けます」

奏「きつくなったら何時でも言っていいいからね？おぶってあげるから」

~~~~~

奏「ん？ギンガ。もしかして、青色の短髪で泣いているあの子？」

ギ「スバル！！・・・あ！危ない！！」

私がスバルの元に寄ろうとすると、スバルの近くにあった銅像がスバルに向かって倒れかかってきました

ギ「スバル。避けて！！」

ス「え！？」

スバルは突然のことに動けませんでした。

ドガシャーン！！

と銅像はスバルに倒れ込みました。

ギ「ス、スバルー！！！」

私は膝をついて、スバルが死んでしまったと思い、涙を流しました。

奏「泣くのはまだ早いよ？ギンガ」

ギ「え！？」

煙が晴れると、奏さんが倒れてきた銅像を支え、スバルを守っていました。すごい力ですね・・・奏さん

奏「スバルって言ったかな？」

ス「え？あ、はい」

奏「もう大丈夫だから、ギンガの所に行ってくれるかな？僕はこの銅像を向こうにやるから」

ス「分かりました。・・・ギン姉」

ギ「スバル！良かった！・・・無事で本当に良かった！」

奏「うん。じゃあ僕は・・・せえの！！」

奏さんは倒れかかってきた逆の方向に銅像を投げ飛ばしてしまいました・・・

奏「ふう。やれやれ・・・」

ギ「奏さんって力が強いんですね」

奏「あつ・・・これは筋肉の力じゃないんだ。ちょっとした特別な力だ」

ス「それは何ですか！？（キラキラ）」

奏「それはね・・・」

ス・ギ「それは！？」

奏「・・・秘密だよ」

ス・ギ「えっ」

奏「それより早くここを出よう！もうすぐここも崩壊すると思うから！」

ス「そうですね。あ！私は『スバル・ナカジマ』です。助けてくれてありがとうございます」

奏「よろしくね、スバル。僕は『紅 奏』。奏って呼んで良いからね？」

ス「はい！奏さん」

奏「元気が良いね。さっきまで泣いていた女の子が嘘みたいだ」

ス「あ！恥ずかしいこと言わないで下さい／＼」

ギ「あはは。ところで奏さん。何処から出るんですか？」

奏「ここは空港だから、何処かに出入口があるはずだからそこを指そう」

ス「は〜い」

~~~~~

奏「どうやらここみたいだね」

ス「でも・・・」

ギ「ガレキが・・・」

私たちはすぐに出入口を見つけることはできましたが、ガレキが入り口を完全に塞いでいました

ス「奏さん。このガレキを持ち上げることは出来ますか？」

奏「いくら僕でもこれは無理だね」

ギ「じゃあ別の道を探しますか？」

奏「いや。もう火は空港全体に広まりつつあるから、別の道を探している暇はない!!」

ス「じゃあどうするんですか!？」

奏「・・・仕方がない。荒っぽく行くかな。二人とも少し離れててくれるかな？」

ギ「分かりました。スバル！こっちに！！」

ス「分かったよ。ギン姉」

ある程度、奏さんから離れると奏さんは構えを取りました。

奏「はあああ！！流派東方不敗が最終奥義！！・・・石破っ！！
天驚拳！！！！」

奏さんが叫び両手を勢いよく出すと、黒光りした巨大な拳がガレキに当たり、軽々とガレキを吹き飛ばし、外の風景が余裕で見えました。

奏「ちょっとやりすぎたかな？」

ス「すごいです！奏さん！！今どうやったんですか！？」

ギ「こら！スバル！そんなに奏さんに問い詰めちゃだめでしょ？」

奏「あはは。じゃあ出ようか？」

奏さんはスバルを右腕に、私を左腕に抱きかかえると、空港から飛び出しました。

~~~~~

ゲ「スバル！ギンガ！」

ス「お父さん！」

ギ「お父さん。ごめんなさい・・・心配をかけて」

ゲ「いや。お前達が無事ならそれで良い・・・お前か？スバルとギンガを助けくれたって言うのは？」

奏「あ、はい。僕は『紅 奏』と言います」

ゲ「俺は『ゲンヤ・ナカジマ』だ。こいつらの父親だな」

奏「そうですか。ではこの後、二人に病院で検診を受けるように言ってください。あの場所に長時間いましたから肺が傷ついているかもしれませんから」

ゲ「分かった」

奏「では僕は行きますね。スバル。ギンガ。じゃあね」

ス「行っちゃうんですか？」

ギ「・・・また会えますよね？」

奏「君たちが会えると信じているなら、きっとまた何処かで会えると思うよ？だから『さよなら』は言わないよ？」

ス「・・・そうですね。また会えますよね」

ギ「また会いましょう。奏さん」

ゲ「どうやら訳ありみてえだな。早く行け。二人を助けてくれた礼

だ。お前の事は秘密にしておいてやる」

奏「ありがとうございます、ゲンヤさん。では」

奏さんはそう言うと、空高く飛んで行きました。

ゲ「感じの良い奴だったな」

ス「うん。それに格好良かった／＼」

ギ「私もそう思った／＼」

ゲ「もしかしてお前ら・・・あいつのこと」

ス「お、お父さん！？な、何を！？／＼」

ギ「わ、私たちは何にも・・・／＼」

ゲ「まあ。そう言うことにしておいてやる。さあ、病院で一応診て貰うぞ」

私たちはその場をあとにしました。また奏さんと出会えると信じて・

ギンガ サイドエンド

奏「ゼウスさん。ギンガ・ナカジマの救出が終了しました。『天界』の転送をお願いします」

ゼ『承知した』

本当の戦いはこれから始まるのであった．．

第八話    それぞれの再会（和葉・恭二）（前書き）

今回は二回に分けて、書きます。ではどうぞ

## 第八話　それぞれの再会（和葉・恭二）

奏　サイド

僕は役目を終えて、『天界』に移動すると、みんなも到着したみたいだった

奏「ふう。やっと『天界』についた」

和「どうやらみんな。同じ時間帯に到着したらしいな」

恭「無事で何よりだ」

修「ところでみんなは誰を助けてきたの？俺ははやてだったよ」

奏「僕はギンガだよ」

和「俺はなのはだ」

恭「私はフェイトだった」

ゼ「四人とも感謝する。これであるべき存在が失われずに済んだ」

奏「でも本当の戦いはこれからですよね？」

和「そうだな。あとはイレギュラーの存在をどうにかしないと・・・」

修「一筋縄に行きそうな相手じゃないと思うよ」

恭「私もそう思う」

ゼ「では今から、アニメの世界に転送する。準備は良いか？」

奏「あ！ゼウスさん。ひとつ頼み事が・・・」

ゼ「・・・分かっている。これだろう？」

ゼウスさんが僕の左手を指さすと、白いブレスレットが着いていた

ゼ「もう説明は必要ないと思うが、そこから様々の楽器を取り出せる」

奏「ありがとうございます、ゼウスさん」

修「へえ。奏って楽器演奏が出来るんだね？」

奏「まあね」

ゼ「では転送する！良いな！？」

四人「~~~~はい！！」

ゼ「では転送開始！！」

僕たち4人は再び光りに包まれた。

~~~~~

奏「ここは？」

和「どうやら何処かの森のようだが」

恭「何故ゼウスさんはこんな所に私たちを転送したのだ？」

修「取り敢えず移動しよう。ここに居ても何もならないからね」

奏「師匠。ここが何処か分かりますか？」

不敗【少し待て、カナデよ。……ここは『ミッドチルダ』と呼ばれている惑星の山岳地帯だ】

サ【その首都『クラナガン』はここから20キロ離れた所にあるよ】

恭「ではそこを目指すでしょう」

ド【そうだな……っ！！待て！！みんな】

和「どうした！？ドモン」

ド【ここから5キロ離れた場所に、人間とガジェットの反応がある！！】

和「なんだと！？」

奏「和葉。『ガジェット』って何？」

シュ【お前たちが映像で見た、カプセル型の殺人機械の事だ！】

恭「何!？」

修「ドモン。その『ガジェット』の数はどれくらいなの?」

ド【人間の反応は6。そしてガジェットの反応は軽く100を超えている!-!】

奏「まずい!その人間たちが一般人なら間違いなく皆殺しにされる!-!」

和「急いでその場所に向かうぞ!-!」

不敗【・・・どうやらこの人間たちは二組に別れているようだ。わたしたちも二組に別れた方が良くかもしれん】

恭「では私と和葉。奏と修也。この二組で行こう」

サ【一組が上空。一組がここの山岳地帯を走っている『リニアール』にいるよ。オイラの考えは、和葉と恭二が上空。奏と修也がリニアールに向かった方が良いと思うよ?】

奏「じゃあ、それで行こう。・・・師匠!行きますよ!-!」

不敗【わしは何時でも構わん!-!】

和「行くぞ!ドモン!-!」

ド【おう!-!】

恭「頼む!シュバルツ!-!」

シュ【承知した!!】

修「準備は良い?サイ・サイシー!!」

サ【何時でも良いよ!!】

奏・不敗「【マスター!!】」

和・ド「【ゴッド!!】」

恭・シュ「【シュピーゲル!!】」

修・サ「【ドラゴン!!】」

――セットアップ!!――

僕たちはそれぞれのデバイスを起動させると、目的地に向かってバ
ーニアに吹かし、移動した。

~~~~~

奏「あれだ!!」

僕たちは崖の上から様子を見ると、上空で二人の魔導師が、そして  
リニアレールでは四人の魔導師たちが戦っていた。

和「では打ち合わせ通りに俺と恭が空、奏と修也がリニアレール  
の魔導師たちを助けるぞ!」

恭「気を引き閉めてかかるぞ!!」

修「行こうぜ!!みんな」

和・恭「行くぞ!!ガンダムファイト!!」

奏・修「レディー!!」

四人「」「」「ゴー!!」「」「」

奏 サイドエンド

なのは サイド

あの事件から8年が経ちました。私はみんなからの応援もあって、私は無事に魔導師に戻る事が出来ました。

な「フェイトちゃん。大丈夫?」

フェ「私はまだ行けるよ?なのは」

な「でもこのガジェットの動き・・・速い!」

フェ「うん。今まで見てきた同じガジェットなのに今回はスピードがかなり上がってる!」

な「フォワード達は大丈夫かな?」

フェ「だから私たちが早く行かないと!!」

な「そうだね！！レイジング・ハート！行くよ！！」

レ【イエッサー】

フェ「バルディッシュュ！！」

バ【イエッサー】

な「デイベイーン！！」

フェ「プラズマ・ランサー！！」

な「バスターー！！！」

フェ「ファイア！！！」

ドガアアアン！！

と私たちの砲撃はガジェット集団を巻き込んだ。でもガジェットは一向に減りません。

な「これはキリがないよ！！」

シャーリー

『なのはさん！』

な「どうしたの？シャーリー」

シャーリー

『先程、そちらに近づく4つ高速の反応がありました！！そして二

組に別れ、その一組がなのはさんとフェイトさんの所に向かいました！！」

フェ「管理局からの増援か、敵の増援かもしれないから油断せずに行こう！なのは」

な「そうだね。フェイトちゃ・・・危ない！フェイトちゃん！」

フェ「っ！！なのは！後！！」

私たちの背後からガジェットが物凄い勢いで突撃してきました。

な「まさか特攻！？フェイトちゃん！シールドを！！」

フェ「ダメ！間に合わない！」

シャーリー

『なのはさん！フェイトさん！来ます！！』

な・フェ「え！？」

私たちがガジェットの直撃を覚悟した瞬間、私たちの横を何かが通り過ぎ・・・

？「はあっ！！」

？「せやっ！！」

その声が聞こえると私に突撃してきたガジェットは吹き飛ばされて爆散して、フェイトちゃんに突撃してきたガジェットは真つ二つに

なつて爆散しました。そして次に目に入ったのは、体を黒い装甲を纏い両腕にはトンファー型ブレイドを身につけた魔導師と・・・

な「あれって・・・」

8年前、あの病室で見た六枚の羽をつけた、白い『天使』でした。

なのは サイドエンド

フェイト サイド

フェ「あれって、もしかして・・・」

私たちがガジェットから救ってくれたのは4年前、私とエリオを救ってくれた、あの機体でした。

フェ（もしかして、恭・・・）

白「大丈夫か!？」

な「あ、はい!大丈夫です」

黒「私たちもこいつら破壊することに手を貸そう。君たちは後方から私たちを援護してくれ!」

フェ「あ、あの!ちょっと話が・・・」

白「話はこいつらを片付けてからだ!・・・来るぞ!」

フェイト サイドエンド

和葉 サイド

ドカツ！ バキッ！ ゴスッ！

和《数ばかり、ごちゃごちゃと！！》

恭《和葉。ここはお互いの大技で一氣に決めた方が良いと思うぞ！》

和《そうするか！》

恭《行くぞ！！和葉！！》

俺は『石破天驚拳』の、そして恭二は『シユテュルム・ウント・ドランク』の構えをとった。

和「今から大技を放つ！巻き込まれなくなければ、この場から一時離脱しろ！！」

白服「わ、分かりました！」

黒服「では離脱します」

白服と黒服の魔導師たちがかなり離れると・・・

和「はあああ！！流派東方不敗が最終奥義！！石破つ！！天驚拳！！！！」

俺の放った『天驚拳』は次々とガジェットを爆散させていった。勿論、取りこぼした物は・・・

恭「私が居ることを忘れるな！シユテュルム・ウント・ドランク！」

恭二は体を回転させ、小さな竜巻のようにガジェットを次々と切り裂いた。

~~~~~

和《ドモン。ここらの上空にガジェットの反応はあるか？》

ド《いや。ガジェットの反応はない》

和《そうか。良かった》

俺は安心して地面に降り立った。すると・・・

白服「あ、あの・・・もしかして・・・和葉さん・・・ですか？」

和「ん？」

白い服を着た茶髪のポニーテールの女性の魔導師が俺に話しかけてきた・・・

和「・・・まさか・・・なのは・・・なのか!？」

俺はデバイスを解除すると、なのはは涙目になり・・・

な「はい！私です！なのはです!・・・和葉さん!！」

と勢いよく俺に抱きついてきた。

和「お、おい！なのは／＼／」

な「やっと・・・やっと会えました・・・和葉さん」

和「なのは・・・」

俺はなのはの涙を見ると、耐えきれなくなり、なのはを優しく抱き締めた。

和葉 サイドエンド

恭二 サイド

私はガジェットを切り裂き、地面に降り立った。

恭《シュバルツ。敵の反応はあるか？》

シュ《敵の反応は無い》

恭^{そつか}

黒服「恭二・・・なの？」

恭「何？」

私が振り返ると、黒服を着た金髪の女性の魔導師が私に話しかけてきた。

恭「君はまさか・・・フェイトか!？」

私がデバイスを解除すると、フェイトは私に抱きついてきた。

フェ「恭二・・・やっぱり恭二だ」

恭「フェ、フェイト／＼いきなり何を!？」

フェ「会いたかった・・・会いたかったよお」

恭「フェイト・・・」

私はフェイトを優しく抱き締めた。

恭二 サイドエンド

第八話 それぞれの再会（和葉・恭二）（後書き）

アカ「くう〜。羨ましいことされちゃって二人とも」

奏「見ているこっちが恥ずかしくなったよ／＼」

和・恭「／＼／」

修「はいはい。ごちそうさま！指摘と感想。よろしくお願いします。」

第九話 それぞれの再会（奏）（前書き）

今回は奏の再会です。（修也は後になります）では、どつぞー！

第九話 それぞれの再会（奏）

和葉と恭二が戦っている同時刻

スバル サイド

私たちの初任務はリニアールに保管されているロストログア『レリック』を回収することだけど・・・

ス「ティア〜〜こいつら多すぎるよ〜〜」

テ「弱音を吐かない！バカスバル！！」

ス「でもぜんぜん減らないよ〜〜」

テ「確かにこの数はちよつと不味いわね。カートリッジも残りが少ない・・・」

エ「どうしますか？ティアナさん」

キ「私とフリードはまだ戦えます！」

フ「グオオ！！」

キ「ヤロはさつき竜魂召喚（だったかな？）を成功させて、大きくなつたフリードに乗って戦っている。」

エ「でもガジェットの動きが訓練の時よりもかなり早いです！！」

テ「改造が施されたんだと思う。三人とも油断しないように！」

ス「りょうか・・・ティア！危ない！！」

エ「キャロ！危ない！！」

テ・キ「え！？」

普通のガジェットよりかなり大きい『ガジェット？型』が素早く触手を伸ばして、ティアとキャロの首に巻き付け、宙吊りにした。

ギリギリ・・・

テ「く、苦しい・・・」

キ「え、エリオ君・・・」

ス「ティア！キャロ！」

エ「スバルさん！行きましょう！！」

私たちが二人を助けに行こうとするとガジェット達が行く手を塞いだ。

ス「邪魔するな！はあああ！！」

エ「てやあああ！！」

でもガジェットの集団は一向に減らなかった。

テ「くっ……」

キ「けほっ……」

ス「ティアー!!」

エ「キャロー!!」

私たちがティアとキャロが死んでしまうと思い、涙を流したその時・

?「その手を!!」

?「離せえええ!!」

ス・エ「え!?!」

その叫び声が聞こえると、ティアとキャロを苦しめていた触手が真つ二つになって、ティアとキャロは触手から解放された

ス「な、何が起きたの?」

エ「スバルさん!ティアナさんとキャロが!!」

ティアとキャロが触手から解放されたけど、二人は気絶しているみたいで今にもリニアールから落ちそうになって、そして落ちた・

エ「フリード!早く二人を!!」

フ「グオオ!!」

フリードが助けに行こうとすると、体が緑と白の装甲で纏っていた魔導師がキャロを抱き抱えていた。そしてティアナは……

ス「え!? あれって……」

あの時、空港で私を助けてくれた黒色の機体が抱き抱えていた。

スバル サイドエンド

はやて サイド

シャーリー

「スターズ4。ライトニング4。無事に救出されました!!」

アルト

「でも彼らは一体何者なんでしょうか？」

は「あれは!?!」

ルキノ

「はやてさん、ご存知なんですか？」

は「いや。なんでもない（あの緑の機体。もしかして……）」

うちは疑問に思いながら映像を眺めていた。

はやて サイドエンド

スバル サイド

ティアとキャラを助けてくれた魔導師たちは二人を抱き抱えて、私たちの元に飛んできた。

ス「あ、あの！二人を助けてくれて、ありがとうございます！！」

黒「礼は後だ。今から俺たち二人でここらのガジェットを殲滅する！！」

エ「そんな！僕たちも戦います！！」

緑「君たちは気絶した二人を守るんだ！！俺たちが倒し損ねたガジェットを倒してくれ！！」

ス・エ「わ、分かりました！！」

黒「良い返事だ！」

そう言う二人の魔導師は、ティアとキャラを下ろして、ガジェットの集団に飛び込みました。

紺「てえやあああ！！」

緑「はいやあああ！！」

紺色の魔導師は手に布のようなものを持つと、ガジェットを弾き飛ばしたり、絡ませて引き寄せ、無数の蹴りを浴びせたりしていました。そして緑色の魔導師は龍の頭をした両腕を伸ばして、ガジェットの貫いたり、長い槍のようなもので真っ二つにしていきました。

ス「す、すごい!!」

エ「圧倒的です!!」

テ・キ「ん・・・けほっ」

ス「あ! ティア!! 大丈夫!？」

エ「キャロも大丈夫!？」

テ「え、ええ。何とか」

キ「けほっ。でも誰が私たちを助けてくれたんですか？」

エ「今、戦っているあの人達だよ」

テ「・・・すごい!」

キ「はい。動きがとても早いです!!」

~~~~~

次々とガジェットが撃墜されて、残ったのは私たちを挟むようにいる『ガジェット? 型』の二体だけになっていた。

奏《こいつらを許すことは出来ない! 二人の命を奪おうとしたこいつらだけは!!》

修《そうだね。大技で引導を渡そうか?》

黒「いくぞ！！俺のこの手が黒く輝く！！お前を倒せと轟き叫ぶ！！」

すると紺色の魔導師の両手が黒く輝き、目にも止まらない速さでガジェットに近づいた。ガジェットは触手を伸ばして、魔導師に絡めようとするけど速さすぎて捕らえることが出来なかった。そして・

黒「ダークネス！！フィンガー！！！！」

ガシュッ！！

とその右手がガジェットを貫いた。

黒「まだだ！！うおおお！！！！」

片腕あの巨体持ち上げてしまいました。

FW四人「『ええええええええ！！？』」

そして右手に魔力みたいなものが収束していきました

紺「これで終わりだ！！カーズ！！エンド！！！！」

ドガアアアン！！！！

とガジェット型は跡形もなく爆散しました。

エ「すごいです！あの巨体を片腕で持ち上げるなんて！！」

テ「・・・本当に人間なのかしら？」

キ「スバルさんは持ち上げることができますか？」

ス「・・・」

キ「スバルさん？」

ス「あの人だ・・・あの人に間違いない！！」

私が近寄ろうとすると・・・

緑「天に竹林！！地に少林寺！！目にもの見せよう！！！！最終秘伝！！！！」

緑色の魔導師が飛び上がると、体が緑から金に変わり、その背中に緑色の『蝶』の羽のようなものが表れた。

テ「何なの！？あれは・・・」

ス「うわあ！！ティア！！あの羽、すごくキレイだよ！！」

テ「うるさい！バカスバル！！でも・・・」

エ・キ「本当にキレイです」

緑「真流星胡蝶剣！！！！」

金色になった魔導師はさらに飛び上がり、ガジェット型に流星のよ

うに飛び蹴りを当てようとすると、ガジェットがシールドを張ったけど、意図も簡単に壊れ、直撃した。ガジェットは吹き飛び、爆散した。

テ「あの人もすごい・・・あのシールドを簡単に破壊するなんて」

エ「僕もあんな風に戦いたいな・・・」

スバル サイドエンド

奏 サイド

奏《師匠。敵の反応は？》

不敗《敵の反応はもうない。どうやら終わったようだ》

修《とりあえずあの四人に会おう、奏。首を締められたあの二人も気になるし》

サ《オイラもそうした方が良いと思うよ？》

奏《分かった》

青髪「あの・・・奏・さん・・・ですか？」

奏「え！？」

僕が振り返ると、青髪の少女が僕に問いかけてきた。

奏「君は・・・スバル！？」

ス「はい！スバルです！！」

僕がデバイスを解除すると、スバルが飛びついてきた。

ス「会いたかったです！奏さん！！」

奏「相変わらず元気の良さは人一倍だね、スバル」

ス「それが私の取り柄ですから！」

奏「そうか。ギンガは元気になっているかな？」

ス「はい。ギン姉も奏さんに会いたがっていましたよ？4年も会っていないんですから」

奏「二人には悪いことをしてしまったね。ごめんね」

ス「いえ。またこうして会えたんですから大丈夫です」

修「ねえ、奏。彼女とは知り合いなの？」

スバルと話していると修也が話に入ってきた。

ス「奏さん。この人は？」

修「初めて会っね。俺は奏の仲間で『緑川 修也』。よろしくな」

ス「私は『スバル・ナカジマ』二等陸士です。よろしく願いします、修也さん」

僕たちが自己紹介をしているとオレンジ色の髪をしたスバルと同年代と思う女子と赤髪の少年とピンク色の髪をした少女と小さな白い竜が寄ってきた。

テ「このバカスバル！ 私たちにも自己紹介させなさいよ！ 私は『ティアナ・ランスター』二等陸士です。先程は助けてくれて、ありがとうございます、修也さん・・・えっと」

奏「僕の紹介はまだだったね。僕は『紅 奏』。よろしくね」

エ「僕は『エリオ・モンディアル』三等陸士です。よろしくお願います、奏さん、修也さん」

キ「私は『キャロ・ル・ルシエ』三等陸士です。助けて下さって、ありがとうございます。こっちは私の竜で『フリードリヒ』です。『フリード』って呼んであげて下さい」

フ「きゅくく」

修「すごい。本物の竜だ！！」

奏「フリードって言うんだね。おいで？フリード」

フ「きゅくく」

パタパタ

フリードは僕のもとに寄ると右肩に乗り、羽を閉じた。

奏「フリードはとても人懐っこいんだね、キャロ」

キ「いえ。フリードが初対面の人にこんなに懐くなんて、滅多にありませんよ?」

修「じゃあ俺も・・・おいで?フリード」

フ「きゅくくく」

フリードは僕から離れると、修也の右肩に乗り、頬ずりしてきた

フ「きゅいくく」

修「あはは。かわいい奴だな」

僕達が戯れていると・・・

和「奏。大丈夫か?」

恭「そちらも終わったようだな」

?「みんな。怪我はない?」

?「エリオ、キャロ。大丈夫!?」

和葉と恭二と白い服を着たオレンジ色の髪をした女性と黒い服を着た金髪の見慣れない二人の女性が飛んできた。

奏「和葉!恭二!こっちは何ともないよ」

修「そんなことより二人は大丈夫なの？」

和・恭「俺（私）は問題ない」

奏「そうか。ところでこの人たちは？」

な「自己紹介がまだでした。私は『高町 なのは』一等空尉です。スバル達を助けてくれてありがとうございます」

フェ「私は『フェイト・テストロッサ・ハラオウン』執務官です。エリオとキヤロを助けてくれてありがとうございます」

奏「ご丁寧ありがとうございます。僕は『紅 奏』です」

修「俺は『緑川 修也』。よろしくな」

エ「もしかして・・・恭二さんですか!？」

恭「む?・・・君はエリオか!？」

エ「はい!エリオ・モンディアルです!」

恭「たくましくなったな。元気にしていたか？」

エ「はい!兄さん・・・じゃなかった恭二さん!」

恭「ふつ。君の好きなように呼べば良い」

エ「では・・・兄さん!」

フェ「えっと。恭二たちはこれからどうするの？」

和「そう言えば何も考えていなかった・・・」

な「じゃあ私たちの『機動六課』に来ませんか？和葉さん」

奏・和・恭・修「・・・機動六課？」「」「」

ス「私たちの家みたいなものです、奏さん」

エ「とても良い所ですよ？」

奏「行く当てがないから、行こうか？」

和「俺もそうした方が良いと思う」

恭「無闇に動くのは良くない」

修「じゃあ決まりだね！！」

こうして僕たち4人は機動六課に向かうことになった。

奏 サイドエンド

## 登場人物紹介（前書き）

今回はオリキャラの紹介です。

## 登場人物紹介

名前 紅 奏

(くれない) (かなで)

歳 24歳

髪型・色 右目側にウェーブをかけた茶髪

性格 心優しい

趣味 音楽鑑賞・楽器演奏

・普段は優しいが戦闘や訓練の時は性格が180度変わって、厳しくなる。

~~~~~

名前 白銀 和葉

(しろがね) (かずは)

歳 25歳

髪型・色 左目側にウェーブをかけた銀髪

性格 厳しいが思いやりがある

趣味 スポーツ(特に球技)

~~~~~

名前 黒原 恭二

(くろはら) (きょうじ)

歳 25歳

髪型・色 Gガンダムのキョウジ・カッシュ

性格 厳しいが思いやりがある

趣味 ギター・釣り

~~~~~

名前 緑川 修也

(みどりかわ) (しゅうや)

歳 22歳

髪型・色 オールバックの金髪(もともとは黒だったが『天界』で染めた)

性格 心優しく、人思い

趣味 料理(特に中華料理)

登場人物紹介（後書き）

修「俺は一体、何時になったらはやてと再会できるんだ？」

奏「多分、十話くらいだと思うよ？」

和「指摘・感想。よろしく頼む」

第十話 修也の再会とこれから（前書き）

Gガンのメンバーが空気になってる・・・

第十話 修也の再会とこれから

機動六課・社内

修也 サイド

修「久しぶりだね、はやて。君が機動六課（こく）の部隊長になっていたなんて驚いたよ」

は「ほんまに久しぶりやな、修也君」

そう言うとはやては俺に抱きついてきた。

修「は、はやて！？／／／」

は「会いたかったで？修也君・・・」

修「はやて・・・」

奏「良かったね、修也。再会することができて」

修「ああ。はやて、そろそろ離れてくれないかな？」

は「いゝや。なのはちゃんや、フェイトちゃんが和葉さんや恭二さんにくっついていたんやから、うちも同じ時間やらんと落ち着かん」

な・フェ「は、はやて（ちゃん）／／／」

和「恥ずかしいことをさらっと言わないで欲しいぞ・・・／／／」

奏「和葉はなのから、恭二はフェイトから抱きつかれたんだ？」

恭「・・・／＼／」

今ここにいるのは俺たち4人と、なのは、フェイト、はやて、だけだった。当然、自己紹介も済ませてある

は「堪能したわ〜。もうええよ」

修「そうか」

は「まずはお礼を言わなあかな。あなた方のお陰でガジエットの殲滅。レリックの回収が出来ました。ほんまに、ありがとうございます」

奏「お礼なんていらないよ？」

和「そうだ。俺たちの目的もガジエットの殲滅だったからな」

恭「人の命を救う事が出来たことは何より嬉しいことだ」

修「そうだよ、はやて。俺たちは当たり前の事をやっただよ？」

な「それでも私たちやフォードたちも助けてくれたことに本当に感謝してます」

フェ「助けがなかったらティアナとキャロは・・・」

奏「その先は言わないで良いよ？フェイト」

な「そう言えばどうして和葉さんたちは、あんな所にいたんですか？」

和「それはだな。信じがたい話だが俺たちはこの世界の住人ではない」

は「え？でも名前から見ると4人とも地球の日本出身やる？」

修「鋭いね、はやて。確かに俺たちは地球出身だけど・・・『平行世界』から来たって言ったら分かるかな」

フェ「平行世界・・・『パラレルワールド』のこと？」

恭「そう。つまりIFの世界から来たと言うわけだ」

な「でもどうしてこの世界に？」

奏「僕たち以外にこの世界に僕たちの世界の住人が入りこんだからだよ。僕たちはその人たちを監視するために来たんだ」

和「しかし。居場所すら分かっていないけどな」

は「なるほどな。・・・実はみなさんにお問い合わせがあるんです」

奏・和・恭・修「「「「「？？」」「」「」」

は「・・・機動六課に民間協力者として入ってもらえますか？」

奏・和・恭・修「「「「「え？」」「」「」」

は「勿論、君たちの事を優先させてもええ。でも何も無いときはうち達に協力して欲しいんや!！」

な「あ! 私からもお願いします」

フェ「私からもお願い」

そう言うとなのは、フェイト、はやての3人は頭を下げてきた。

奏「僕は是非お願いします」

和「自分の居場所が出来るから俺からもよろしく頼む」

恭「私も協力しよう」

修「俺も構わないよ? むしろ、そうさせてくれないかな?」

は「あ、ありがとうございます」

奏「でも条件があるよ?」

な「何ですか? 奏さん」

奏「とても簡単なことだから安心して? 僕たちの4人の衣食住。そしてこの世界の言葉を覚えるために講師をお願いします」

和「そうだな。戦闘がないときには書類整理などを手伝うことができれば良いからな」

フエ「それなら私が教えてあげるよ」

は「決まりやね。ではみなさん。ようこそ機動六課へ！」

奏・和・恭・修「」「」「こちらこそ、よろしくね（頼む）」「」「」

こうして俺たちは機動六課に協力することとなった。

は《みんな。感じの良い人たちやね？》

な《うん。みんな私たちより年上だし、頼りになると思うよ？》

フエ《それに私たちより強い！》

は《しかも、みんなイケメンやし♪》

~~~~~

俺たちは自分たちの部屋に案内された後、俺たちの事を紹介するつて六課の制服に着替えさせられ、メインホールに呼び出された。メインホールには六課のメンバーが全員集まっているらしい。

は「今日からここで民間協力者として入ることとなった人や。じゃあ、奏君から自己紹介を」

奏「僕は『紅 奏』です。これからよろしく願いします」

和「俺は『白銀 和葉』。よろしく頼む」

恭「私は『黒原 恭二』。覚えておいて貰おう」

修「俺は『緑川 修也』。よろしくな」

パチパチ

女1「新しい人たちってみんな男性なのね」

男1「ここは女性がほとんどだから、仲間が増えて良かった」

女2「みんなイケメンね／＼。『紳士系』『クール系』『お兄様系』『ワイルド系』」

男2「俺も早く彼女作らないと・・・」

は「それじゃあ紹介は終わりや。お疲れ様」

あつという間に俺たちの紹介は終わった。（早・・・）

は「あ。そう言えば4人にはうちの騎士達を紹介しとらんな」

修「はやてって5人家族だったよね？もしかしてその4人が？」

は「そう言うことや」

すると赤髪の少女とピンク色の髪をした女性とシャルさんと一匹の犬が俺たちの元に寄ってきた。

は「じゃあ紹介するね？修也君は知つとるかもしれんけど金髪の女性が『シャル』や」

シャ「初めまして、シャマルです。修也さんは久しぶりね」

修「お久しぶりです、シャマルさん」

は「そして赤髪が・・・」

ヴィ「ヴィータだ」

和「久しぶりだな、ゴスロリ」

ヴィ「だから、あたしはゴスロリじゃねえ!!」

は「何や？和葉君とヴィータは知り合いなん？」

和「なのはを助けた時に知り合った」

ヴィ「次、ゴスロリって言ったらハンマーで殴るからな!!和葉!!」

和「分かった、ヴィータ」

は「次にピンク色の髪が・・・」

シ「シグナムだ。お前か？主はやてを助けてくれたのは？」

修「まあ、見過ごすわけにはいかなかったしね」

？「それでも主を助けてくれたことに感謝する」

恭「犬が喋った!？」

？「私は・・・」

奏「待つて恭二。犬じゃなくて狼だと思っよ？」

ザ「その通りだ。紹介がまだだった。私はザフィーラだ。よろしく頼む」

シ「緑川だったな。今度私と模擬戦をやってくれないか？」

修「俺もシグナムの實力がどれほどか見てみたいから、良いよ」

和《なのは。もしかしてシグナムは・・・》

な《にやはは。シグナムさんはバトルマニアってみんなから呼ばれています。強い人が来ると何時も模擬戦をやってくれと頼むんです》

和《なるほどな。》

~~~~~

俺たちは紹介が終わると各自の部屋に戻った。

奏の部屋

奏「これからどうなるのでしょうか？師匠」

不敗【まあ。様々な問題が起こることは間違いないじゃろつ。だがお前は一人ではない！それを忘れてはならぬ】

奏「そうですね。ありがとうございます、師匠」

不敗【スバルと言うあの少女をお前が鍛えてみてはどうだ？】

奏「僕がですか!？」

不敗【あの少女も格闘を使う。『気』を使った技を教えることは出来なくとも格闘戦を指摘することはお前にも出来ると思うが？】

奏「僕にできるでしょうか？」

不敗【お前はわしの認めた流派東方不敗を受け継ぐ者だ。自信を持つて良い】

奏「・・・そうですね。やってみます」

和葉の部屋

和「なのはがこのエースか・・・」

ド【あれ以来、相当なりハビリをやったと思うぞ。俺も彼女の心の強さには感服したぞ】

和「二度とあんな事が起こらないように俺がなのはを守らないとな」

ド【お前まさか、なのはのことを・・・】

和「・・・」

ド【まあ。応援ぐらいはやってやるさ】

和「すまない、ドモン」

恭二の部屋

恭「・・・」

シュ【またフェイトのことを考えていたのか？】

恭「それもあるが、エリオの事もな」

シュ【あの少年か。たくましくなっていたな】

恭「ああ」

シュ【お前の事を兄と呼ぶそうだが、良かったのか？】

恭「構わない。あの少年は幼い頃は孤独だったはずだ。私とフェイトでその孤独を埋めてやりたいと思ってな」

シュ【家族思いだな。お前は】

恭「家族か・・・」

修也の部屋

修「・・・」

サ【どうしたの？修也】

修「ちよつと考え事」

サ【もしかして、はやてお姉ちゃんのこと？】

修「そう。少し見ない間に、ここの部隊長になってるし、それに・・
」

サ【綺麗になってる？】

修「なっ！？／／／」

サ【にひひ。その思い叶うといいね】

修「ありがとう、サイ・サイシー」

こうして俺たちの１日は終わった。

修也 サイドエンド

第十一話 訓練（前書き）

今回は奏と修也の戦闘訓練です。ではどうぞ（あとマスターガンダムの色は紺色では無かったので『黒色』に変更しました）

第十一話 訓練

奏 サイド

奏「ん？・・・朝か。ちょっと外に出てみようかな。スバルが今日、朝練があるって言ってたし」

まだ朝6時だけど、僕は着替えを済ませ、部屋を出ると修也も起きてきた。

修「はいね、奏」

奏「おはよう修也」

修「和葉たちはまだ寝てるみたいだ」

奏「スバルたちが朝練をやっているみたいだから僕たちも行ってみようか？」

修「そうだね」

~~~~~

訓練所に着くと、フォードたちが海の上にある廃墟でガジェット  
の殲滅訓練をやっていた。

な「あ！奏さん、修也さん。おはようございます」

奏「おはよう。なのは、ヴィータ」

ヴィ「オッス」

修「それにしてもすごいね。こんな廃墟が海の上にあるなんて」

な「えへへ。実はこれ本物じゃないんです」

奏「ん？じゃあつまり『ホログラム』みたいなもの？」

ヴィ「まあ、そんなとこだな」

修「でも普通に触れたり、破壊できたりしてる。精巧なホログラムだね」

な「私の自信作です。ところで奏さん、修也さん。フォアードたちの動きはどうですか？」

奏「そうだね。まだまだ粗っぽい所があるけど」

修「訓練と実戦を積みめば、まだまだ強くなれると思うよ」

ヴィ「まあ。あいつらは筋は良いからな」

~~~~~

ス「あ！奏さん、修也さん」

奏「お疲れ様。スバル、ティアナ、エリオ、キャロ」

テ「ずっと見ていたんですか？」

修「君たちの実力がどれ程ものか気になったからね」

エ「僕たちの動きはどうでしたか？」

奏「無駄な動きが多かったね。動きを少なくすることで隙を減らすこともできるよ」

キ「うゝん。難しいです」

修「あはは。少しずつ動きを覚えていくと良いよ」

ス「じゃあ。奏さんと修也さんが見本をみせてください!!」

奏・修「え!?!」

な「じゃあ奏さんと修也さんもやってみますか？」

奏「・・・じゃあ朝の運動ということをやってみようか？修也」

修「そうだね」

僕たちは廃墟に中へと進んだ。

な「ガジェットの数と種類はどうしますか？」

奏「そうだね。カプセル型の『?型』を50。飛行型の『?型』を40。大型の『?型』を10でお願いするよ」

ス「ちよつと多すぎだと思えますけど!?!」

修「俺たちはこれくらいが丁度良いからね」

な「分かりました」

奏《師匠。行きます！！》

不敗《わしは何時でも良いぞ！！》

修《行くぜ。サイ・サイシー！！》

サ《オイラも何時でも良いよ！！》

奏・不敗「【マスター！！】」

修・サ「【ドラゴン！！】」

――セツトアップ！！――

僕たちはデバイスを起動させると、構えを取った。

奏 サイドエンド

なのは サイド

な《あれが奏さんと修也さんのデバイス・・・》

ヴィ《やっぱり和葉のデバイスに似てるな、なのは》

な「《うん。》・・・では始めます！」

奏《修也。俺は空のガジェットを破壊する！地上はお前に任せる！空が終わったらお前の援護に回る》

修《分かった！！》

奏「行くぞ！！流派東方不敗の名の元に！！」

修「ガンダムファイト！！」

な「レディー！！」

奏・修・な「「「ゴー！！」」」

~~~~~

奏「てえやあああ！！」

修「はいやあああ！！」

FW・な・ヴィ「「「・・・」」」

開始から5分。空に飛んだ奏さんは『？型』を格闘と腰布のようなビーム兵器『マスタークロス』を使い、軽々と殲滅した。そして修也さんは長い棒『フェイロン・フラッグ』を使い、『？型』を真つ二つにしたり、投合して串刺しにしたりして殲滅した。残りは大型の『？型』だけとなりました。

な「なんか圧倒的だね？ヴィータちゃん」

ヴィ「ああ。あいつらの動き・・・全く無駄がねえ」

ス「うわあ。やっぱり奏さんはすごいな〜!!」

エ「はい。兄さんに負けていません!」

キ「すごいね。フリード」

フ「きゅく〜」

テ「何て力なの・・・」

私たちが奏さんと修也さんに夢中になっていると・・・

シ「どうやら緑川たちが戦っているようだな」

ヴィ「シグナム。お前いつの間に?」

シ「今来た所だ。・・・高町。一つ頼みがある。この戦闘が終わったら緑川と模擬戦をやらせてくれ」

な「え!?!・・・それは修也さんに聞かないと」

シ「ではここで待っているでしょう」

私たちは再び、奏さんたちの戦いを見始めた。

奏「残りは?型だけか・・・」

修「でもこいつら一つに固まっているから無闇に突っ込むのは無謀

だな」

奏「・・・なら修也。『あれ』をやるか？」

修「・・・なるほど。『あれ』なら対応できるかもね」

な「『あれ』って何のことかな？」

ヴィ「あたしが知るかよ」

奏「行くぞ！！修也！！」

修「おう！超級！！」

奏「霸王！！」

奏・修「「電影弾！！！！」」

すると奏さんが回転し始め、一つの『竜巻』が起こりました。でも頭の部分が回転していませんでした。どんな構造をしているのでしょうか・・・

な「すごい。あれじゃまるで竜巻・・・」

ヴィ「あれを喰らったら一溜まりもないぜ」

シ「だが。頭の部分が回転していないが・・・？」

ギョルルル！！！！

奏「撃て！！修也！！！」

修「はiiiiiiii！！！」

修也さんは奏さんを後ろから『フェイロン・フラッグ』で殴り、奏さんを押し出しました。

奏「うおおおおお！！！」

ドガガガガガ！！！！

奏さんは？型を次々と破壊して行きました。そして動きを止めて独特の構えを取ると・・・

奏「爆発！！！」

ドガアアアン！！！！

と大爆発が起こって？型はその爆発に飲まれて、爆散しました。

テ「何て出鱈目な技・・・」

エ「カッコイイな。今の技！！」

キ「エリオ君ならきつとできるよ」

ス「流石奏さんです！あんなにたくさんいたガジェットをあつという間に倒してしまうなんて！！（キラキラ）」

な「あはは。スバルは奏さんに憧れているみたいだね」

シ「ますます。戦いたくなってきたぞ!!」

ヴィ「あたしもやるかな」

なのは サイドエンド

修也 サイド

修「どうやら終わったようだね」

奏「・・・いや。そうでもないみたいだぞ？」

修「え？」

俺は奏の向いている方を見ると、白い騎士甲冑を身に纏い、右手には剣を握ったシグナムと赤いゴスロリ服を着て、ハンマーを右肩に担いでいるヴィータが立っていた。

奏「どうやら次の相手は彼女たちみたいだな」

修「・・・和葉がヴィータにゴスロリって言った理由。分かる気がする・・・」

ヴィ「おい！修也！てめえ、聞こえてるぞ!!」

シ「落ち着けヴィータ。次は私たちが相手だ！紅。緑川」

な「ごめんなさい奏さん、修也さん。シグナムさんとヴィータちゃんはどうしても戦いたいっていうので」

修「構わないよ、なのは。俺もシグナムの实力を見てみたかったしね」

奏「守護騎士と呼ばれている彼女たちの実力がどれ程のものか興味はあるからな」

シ「では私が緑川。ヴィータが紅と言うことで良いか？」

ヴィ「あたしはそれで構わないぜ？」

修「俺も良いぜ？」

奏「同じく」

シ「では始めるぞ！緑川！！『烈火の将・剣の騎士』シグナムと『炎の魔剣・レヴァンティン』が相手になる！！」

ヴィ「同じく『紅の鉄騎・鉄槌の騎士』ヴィータと『鉄の伯爵・グラーファイゼン』が相手になるぜ！！奏！！」

修「これはご丁寧にどうも。では俺も！！！！『少林寺の技を極めし孤高の龍』緑川 修也が相手になるぜ！！シグナム！！」

サ《なんか微妙だね・・・修也》

修《仕方ないだろ！？今考えたんだから！！》

奏「俺も言わないといけないのか？これは・・・『漆黒と金色の拳闘士』紅 奏が相手になる！！ヴィータ！！」

不敗《お前にしては良い二つ名だ。カナデよ》

奏《ありがとうございます、師匠（でもどうしてこの名前が頭に浮かんだんだろう？）》

シ・ヴィ「いざ！尋常に！」「」

奏・修「勝負！」「」

修也 サイドエンド

## 第十二話 奏VSヴィータ（前書き）

今回は奏とヴィータの模擬戦風景です。では、どうぞ（ヴィータファンの方々申し訳ありません）

## 第十二話 奏VSヴィータ

奏 サイド

ヴィ「うりゃあああ！！！」

奏「くっ！！重い！！」

僕は今ヴィータと戦っているけど、あの小さな体からあんなパワーが出てくるのか不思議だった。

不敗《あの小娘。中々やりおるわ！！》

奏《嘗めてかかるとやられますね！！》

ヴィ「アイゼン！！」

ア【シュワルベ・フリーゲン】

ヴィータの周りに鉄球が5、6個出てくると、それらを僕に向かって打ってきた。

ヴィ「ぶち抜けえええ！！！」

奏「このくらいどうと言うことはない」

僕は鉄球を紙一重で全部かわした。

奏「甘いぞ！ヴィータ！！」

ヴィ「甘えのは、てめえだぜ？奏！！」

奏「何！？」

不敗《奏！後ろじゃ！！》

後ろを振り向くと避けた鉄球がまた僕に向かってきた！！

奏「っ！！この鉄球は誘導型なのか！？ならば」

僕は『マスタークロス』を取り出すと・・・

奏「はあ！！！」

振り回し、鉄球を弾き飛ばして、爆散させた。

奏「なっ！？ヴィータがない！？」

僕は鉄球に気を取られすぎて、ヴィータを見失っていた。

ヴィ「あたしはここだ！！」

奏「っ！！上か！？」

ヴィ「アイゼン！！」

アイ【カードリッジ・ロード】

するとハンマーの片面の形が噴射口に変わり、勢いをつけて僕に殴

りかかった。

ヴィ「ラケーテン・ハンマー！！！！」

奏「うおおお！？」

ドガアアアン！！！！

僕は咄嗟に『マスタークロス』で防いだけど、勢いが強すぎ僕はビルに突っ込んだ。

奏「今のはかなり効いたな・・・」

不敗《流石、騎士と名乗ることはあるようだな？カナデよ》

奏《ですね。僕も本気でいきます！》

不敗《『ハイパーモード』を使うつもりか？・・・良からう！！行くぞカナデよ！！》

奏《はい！》

奏・不敗「【はあああああ！！！！】」

奏 サイドエンド

なのは サイド

な「あちゃー。ヴィータちゃんやりすぎだよ」

ス「うわあ！奏さんが！！」

テ「ヴィータ副隊長に勝つことは奏さんでも無理なんでしょうか？」

和「あいつはまだ本気じゃない・・・」

エ「あ！和葉さん、兄さん。おはようございます！」

恭「おはよう、エリオ」

キ「まだ本気では無いつて。奏さんはまだ何か隠しているんですか？」

和「・・・見てみる。奏を」

FW4人「な」「」「」「え？」「」「」

奏「はああああ！！！」

煙が晴れると、奏さんが構えを取って、心を落ち着かせているようでした。すると、黒色の機体が足から上に上るように金色に変わっていきました。

な「何ですか！？あれは・・・」

和「あれは『明鏡止水』の心境にたどり着いた者のみが習得できる『ハイパーモード』だ」

ス「『メイキヨウシスイ』？」

恭「わだかまりややましさのない清んだ心。それが『明鏡止水』」

和「あの状態になった者は普段の数倍の力を発揮できる。『パワー・スピード・反応速度』つまり人間の身体能力を極限にまで引き上げることができる技だ!!」

奏「てやああああ!!!!」

奏さんが叫ぶと、ガレキの破片が高々と舞い上がりました。

なのは サイドエンド

ヴィータ サイド

ヴィ「お前体の色が変わってるじゃねえか!?それに何だよ!?その気迫は!?!」

奏「ヴィータが本気だから俺も本気になったまでだ!・・・行くぞ!!!!」

シュン・・・

ヴィ「なっ!?!」

ドゴッ!!!!

ヴィ「くっ!?!」(ありえねえ。あの距離を一瞬で縮めやがった!!!)  
アイゼン!!!!」

アイ【コメント・フリーゲン】

ヴィ「ぶち抜けええ!!!」

あたしはさっきより一回り大きい鉄球を奏に向かって打った。

奏「・・・」

ヴィ「なっ!?!あいつ避けねえつもりか!?!」

奏はその場から全く動かなかった・・・そして

ドゴオオオン!!!

と奏に直撃した。

ヴィ「おいおい!!!あいつ大丈夫なのか!?!」

奏「俺の心配をするとはな・・・よほど余裕と見えるな」

ピシッ!!

ヴィ「なっ!?!」

ガラガラ!!!

鉄球にヒビが入ったと思うとあっという間に崩れ落ちた。奏を見ると右の正拳を突きだしていた

ヴィ「お前まさか、あの鉄球を拳でたたき割りやがったのか!?!」

奏「そう言うことだ」

ヴィ「お前、本当に人間かよ!？」

奏「何処かで聞いたような台詞だな。悪いがこれで終わらせて貰うぞ。秘技!!十二王方牌!!大車併!!」

奏が右手を回転させると六つの黒い光が出てきて。そこから小さな機械がアイゼンに向かって飛んできた。そしてあたしは避けきれずにアイゼンに2つの機械が取り付いた。

ヴィ「何だよ!??これは・・・くそっ!!取れねえ!!」

奏「ここだ!!帰山!!笑紅塵!!」

アイ【・・・】

ヴィ「アイゼン!??てめえ、アイゼンに何しやがった!？」

奏「この技は相手のデバイスに取り付けさせデバイスの機能を停止させる技だ。少なくとも1分は動かない!これで終わらせて貰うぞ!俺のこの手が黒く輝く!!お前を倒せと轟き叫ぶ!!」

すると奏の右手が黒く輝き出した。

ヴィ（あれを喰らったらずい!!逃げるしかねえ!!）

あたしが逃げようとする、奏はもうあたしの目の前にいた・・・

奏「逃しはしない!!ダークネス!!フィンガー!!」

ヴィ「やられる!!」

あたしは目を閉じた。だが何時になっても痛みは来なかった。目を開けてみたら、奏があたしの目の前で黒く光る右手を寸止めして、アイゼンをあたしの手からはたき落としていた。

奏「今回は僕の勝ちってことで良いかな？」

ヴィ「・・・みてえだな。やられたぜ」

奏「でもヴィータは本当はリミッターみたいなのがかけられているんでしょ？」

ヴィ「な！？何で分かったんだ!？」

奏「そう感じからだよ。何時か本気の勝負がしてみたいね」

ヴィ「その時は負けねえからな!!奏!!」

奏「楽しみにしているよ」

こうしてあたしと奏の初模擬戦はあたしの敗北で終わった。でも何時か必ず勝つ!!奏にも・・・そして和葉にも!!

ヴィータ サイドエンド

## 第十二話 奏VSヴィータ（後書き）

アカ「さすがだね、奏」

奏「ヴィータもかなり強かった」

修「今回は俺とシグナムの模擬戦だね！！」

和「足下をすくわれないようにな」

恭「指摘・感想。よろしく頼む」

## 第十三話 修也VSシゲナム（前書き）

今回は修也とシゲナムの模擬戦風景です。ではどうぞ。

### 第十三話 修也VSシグナム

奏とヴィータが戦っている同時刻

修也 サイド

シ「はああああ！！！」

修「てえやああ！！！」

俺は『フェイロン・フラッグ』を、そしてシグナムは『レヴァンテイン』をぶつけながらお互いに力量を図っていた。

シ「流石だな。緑川」

修「シグナムこそ大した腕だよ」

シ「ならば。これは避けられるか！？レヴァンテイン！！」

レヴァ【カードリッジ・ロード】

するとレヴァンテインが炎を纏い炎剣と変わった。

サ《修也。あれをフェイロン・フラッグで受け止めることはできないよ！！》

修《何！？》

シ「紫電一閃！！！」

修「っ!!」

俺は咄嗟にフェイロン・フラッグで受け止めたけど。簡単に折れてしまい俺はその反動でビルに突っ込んだ。

修「痛ったー!!!!今のはかなり効いたな」

シ「どうした!? 緑川!! お前の力はこの程度ではないと思うが!」

修「なら!!...はいや!!」

俺はフェイロン・フラッグを投合して、シグナムの周りに突き立てた。

シ「この程度!!」

シグナムはレヴァンティンを振り回して、フェイロン・フラッグを叩き斬った。でも俺の狙いは!!

修「ここだー!!!!」

シ「何!?!」

俺は瞬時にシグナムの頭上に移動していた。

修「喰らえ!!!『宝華教典・五火七令羽旗』!!!」

俺はフェイロン・フラッグをシグナムに向けて思いっきり振り下ろ

した。

バコッ!!

俺はシグナムをとらえていたと思ったけど・・・

修「なっ!! 鞘で防いだ!?!」

シ「まさか私に鞘を使わせるとはな!!」

修「くっ!!」

俺はシグナムから離れて距離を取った。

シ「今度はこちらから行くぞ!! レヴァンティン!!」

レヴァ【シュランゲ・フォーム】

するとレヴァンティンは鞭のような形と変形した。

修「これは連結剣!?!  
デシブルソード」

シ「飛竜一閃!!」

修「速い!! なら・・・はいや!!」

俺はシグナムではなく俺の周りにフェイロン・フラッグを投合した。

シ「何をする気だ!?!」

修「『宝華教典・十絶陣』……！」

シ「なっ！？私の『飛竜一閃』を自分の周りに発生させた火柱で防いだだと！？」

修「ふう。流石にあれを避けることは出来なかったからね。防ぐにはこれしかなかった。そろそろ本気を出させて貰うよ？シグナム！はあああああ……！」

シ「何だあれは！？緑川の体が緑から金色に変わっていく！？」

修「てやああああ……！行くぞ……！シグナム……！」

俺は高く飛び上がり、構えを取った。

修「天に竹林……！地に少林寺……！目にもの見せよう……！最終秘伝……！」

修也 サイドエンド

なのは サイド

修也さんがハイパーモードを発動させて、空に飛び上がると緑の光が背中に集まって『蝶』の羽が出来ました。

ス「あれはあの時の技……！」

な「スバル達は見たことがあるのかな？」

テ「はい。私達を助けてくれたときに見ました」

な「そうなんだ。でもあの羽・・・」

キ「いつ見ても綺麗です」

な「和葉さん。あの技は何なんですか？」

和「あれは少林寺秘伝の最終奥義『真流星胡蝶剣』だ」

エ「真流星胡蝶剣・・・」

な「でもシグナムさんなら防ぐことくらい出来ますよね？」

テ「なのはさん。それは難しいと思います・・・」

な「どうして？ティアナ」

テ「修也さんがあの状態になって、シールドを張った『？型』に跳び蹴りを当てたんですけど、そのシールドがガラスのように簡単に壊れましたから・・・」

な「そんな・・・私でも全力全開の技を当てないと破壊できないシールドを！？」

ス「シグナムさんでも防ぐことは難しいと思います」

なのは サイドエンド

シグナム サイド

シ「それがお前の全力か！面白い！」

修「行くぞ！！シグナム！！」

シ「レヴァンティン！！」

レヴァ【カートリッジ・ロード】

私は再びレヴァンティンに炎を纏わせ、迎え撃つ構えを取った。そして緑川は流星のように私に跳び蹴りをしかけて来た！！

修「うおおおお！！！」

シ「紫電一閃！！！」

ガツーーーーン！！

と緑川の蹴りと私の剣がぶつかり、火花が散り始めた。だが私の剣は次第にひびが入り始め、そして私の手元から飛んでしまい緑川の蹴りが直撃し、ビルに突っ込んだ。

シ「私の技が敗れるとは・・・」

私が体制を立て直そうとすると、緑川がフェイロン・フラッグの先端を私の首元に突きつけていた。

修「今回は俺の勝ちだね？シグナム」

シ「そうだな。私の負けだ」

修「でも嬉しそうな顔してる」

シ「私より強い相手に出会う事が出来たからな。いつかお前を超えてみせるぞ！緑川！！」

修「楽しみにしてるよ、シグナム」

私と緑川の模擬戦はこうして終わることとなった。

シグナム サイドエンド

## 第十四話 模擬戦後（前書き）

今更ですが「」を会話。（）を考え事。【】をデバイスの声。《》を念話。にしていけます。ではどうぞ。

## 第十四話 模擬戦後

スバル サイド

今日の朝練が終わって私たちは朝ご飯を食べに食堂に來ると、修也さんから何かを受け取った。

FW4人「……あの、これは?」「」「」

修「今日の朝食は俺が受け持つことになってね。そのメニューに書かれている物を頼めば俺が作ってやるぜ?」

ヴィ「あ?お前が今日の朝食を作るだつて?」

修「何だよ?その目は……?」

シ「お前が料理が出来るとは思っていなかったからな」

は「心配はいらんで?ヴィータ、シグナム」

な「どうして?はやてちゃん」

は「うちとシャマルは一回、修也君の中華料理を食べたことがあるんや。中華料理の腕前はうちより上や」

恭「そう言えばお前の実家は中華料理屋だつたな」

テ「でも修也さんは疲れていないんですか?」

キ「シグナム副隊長と戦った後なのに大丈夫ですか？」

修「心配してくれてありがとうティアナ、キャロ。俺たちは体力には自信があるから大丈夫だよ。さあ席に着いて料理を決めてくれ！」

私たちFW4人は席に着いたけど、テーブルの真ん中に回る台があった。

ス「これは？」

奏「この上に頼んだ中華料理を置いて、みんなを回しながら食べるんだよ」

テ「中華料理は知っていますけど、こんな食べ方があるなんて知りませんでした。何だか変わっていますね・・・じゃあ私は『八宝菜』にします」

料理の名前に上に料理の絵がついているから、どんな料理か迷わなくてすみそうだった

エ「僕は『酢豚』でお願いします」

キ「えつと私は・・・小？」

和「キャロ。これは『小籠包』と読む」

キ「ありがとうございます、和葉さん」

ス「じゃあ私は『炒飯』にします」

修「分かった。じゃあ少し待っててくれ」

――15分後――

修「お待ち!!」

修也さんは私たちが頼んだ料理を持って来てくれた。

ス「うわあ。美味しそうです!!」

修「小籠包はもう少し時間がかかるから、待っててくれ」

エ「早く食べましょうよ!!」

テ「そうね。じゃあ」

FW4人「「「いただきます」」」

私たちは料理を取り皿について食べ始めた。

修「どうだ？」

キ「すごく美味しいです!」

テ「こんな美味しい八宝菜食べたことはありません!」

ス「修也さん!おかわり!!」

エ「こっちもお願いします!!」

修「早っ！！分かったから慌てて食べるなよ？（今度からスバルとエリオが頼んだ料理は多めに作るか）」

そう言うとき修也さんは厨房に戻っていった。

スバル サイドエンド

奏 サイド

ヴィ「それにしても修也がこんなギガうまな料理を作れるなんてな」

シ「確かに」

な「本当に美味しい」

フェ「私もこんな中華料理は食べたことがない」

和「今度作り方を教えて貰うか」

恭「簡単には行かないと思うがな」

奏「そこは練習あるのみだと思うよ？・・・それからはやて一つ聞きたいことがあるんだけど？」

は「何や？奏さん」

奏「食堂の端に黒いカバーが掛かったものがあつたんだけど。あれって何？」

は「ああ。あれはピアノや」

和「ピアノ？何故六課にピアノが？」

な「機動六課の創設祝いつて事で管理局が送ってきてくれたんです」

恭「なるほどな」

フェ「でも誰も弾かないからあんな風に放置されているの」

和「奏。試しに弾いてみたらどうだ？」

奏「僕が！？」

な「奏さんってピアノが弾けるんですか？」

恭「こいつのピアノの腕は大したものだからな」

フェ「聞きたいな。奏のピアノ」

？「リインも聴いてみたいですよ」

かわいらしい声がする方を見るとはやての隣に30cm位の妖精？が飛んできていた。和葉と恭二もその娘を見ていた。

奏・和・恭「「人形？いや・・・妖精？」」

リ「むう〜。リインは人形でも妖精でもないです！『リインフォース・ツヴァイ』って名前があるですよ〜」

和「これは失礼したな、リインフォース」

リ「リインのことは『リイン』と呼んでくださいです」

恭「分かった、リイン」

奏「よろしくね？リイン」

リ「はいです」

は「リインとの自己紹介も良いかな？うち、早くピアノが聴きたいわー！」

奏「・・・分かった」

僕はピアノが置いてある食堂の端に移動して、カバーを外した。

奏（これって・・・『ニューヨーク』のグランドピアノだ！！）

ニューヨークと言うのはピアノを作っているメーカーの事でこのメーカーのピアノは高級で、滅多に見られない。

は「みんなー。今から奏さんがピアノを聴かせるみたいやから注目やー！」

奏（何でわざわざみんなに知らせるんだ？はやては・・・）

ヴィ「ところで何を弾くんだ？」

奏「そうだね。・・・優しい曲にしようかな。よし、リストの『ラ・カンパネラ』を弾こう」

な「それってとても難しい曲ですよね！？私、家でよくお父さんとお母さんが聴いていましたから知っています」

シ「それほど物なのか？高町」

奏「まあ。聴いてみると良いよ・・・始めるね」

♪♪♪♪♪

奏 サイドエンド

フェイト サイド

奏がピアノを弾き始めると、周りの空気が大きく変わった。始める前は賑やかな雰囲気が一変してとても静かな雰囲気になった。周りを見てみると、食事をしていた局員たちが奏のピアノに魅了されていた。それくらい綺麗な音色だった。

な《すごいね。奏さん》

フェ《うん。ピアニストと同じ位上手い》

は《ここに来る前はピアニストやったんやろか？》

~~~~~

ス《うわあ。ティア。奏さんのピアノ、凄く綺麗だね！！》

テ《五月蠅い！バカスバル！！今聴いてるんだから話しかけないで

!!」

ス（ティアが冷たいよ〜）

~~~~~

キ《エリオ君。すごいね、奏さん》

エ《うん》

キ《私もピアノ弾いてみたいな》

エ《後で奏さんに頼んでみる？キャロ》

キ《うん》

~~~~~

♪♪♪♪♪

パチパチパチ!!!

演奏が終わると拍手が鳴り響いた。

奏「ありがとうございます」

は「よし決めた！奏さん。あなたには夕食の時に必ずピアノを弾いてもらうで!!」

奏「え!?!」

女？「ナイスアイデアです！八神部隊長！！」

女2「こんな綺麗なピアノが毎日聴けるなんて幸せです！！」

奏「・・・はやて。拒否権は？」

は「あるわけないやないですか（笑顔）」

和「諦める。奏」

修「はやては一度言い出したら聞かないからな」

恭「頑張れ・・・奏」

奏「お前達・・・人ごとだからって・・・まあ良いけどね」

な「楽しみにしていますね、奏さん」

フェ「私も楽しみにしてる」

こうして私たちの朝の時間は過ぎていった。

フェイト サイドエンド

第十五話 出張任務・前日

なのは サイド

ス「奏さん。ここはどうしたら良いんですか？」

奏「ああ。ここはね・・・」

エ「兄さん。ちょっと聞きたいことが・・・」

恭「どうした？エリオ」

和「分からない所はあるか？キャラ」

キ「今の所は大丈夫です」

和「分からない所があれば何時でもきいていいからな？」

キ「はい。ありがとうございます、和葉さん」

修「あれ？ティアナ。ここ脱字が無い？」

テ「あ！ホントだ。ありがとうございます修也さん」

和葉さん達が機動六課に来て、3日が経ちました。和葉さん達はあつという間にこの世界の言葉を覚えてしまいました。和葉さん達に言葉を教えていたフェイトちゃんとラインちゃんもこの事に驚いていたようです。今ではFW達に書類整理を手伝うまでになっています。後、キャラは奏さんにピアノを習っているみたいです。

な「凄いですね、和葉さん達は」

和「そんなことはない。ここの世界の言葉は英語に似ているからな。文法は英語そのものだから、あとは単語を覚えれば良かった」

リ「でも本当に修也さん達の覚える早さは凄かったです」

恭「一番良かったのはフェイトとリインの教え方が上手いからだと私は思うが？」

フェ「あ、ありがとう恭二／＼」

奏「本当に感謝してる。ありがとうございます、フェイト先生。リイン先生」

フェ・リ「／＼」

な「そう言えばこの後ミーティングがあるよね？フェイトちゃん」

フェ「うん。恭二達も来て欲しいって言ってたよ？」

恭「私たちもか？」

修「じゃあ行こうぜ？」

和「そうだな」

~~~~~

は「集まったみたいやね。ほんなら今からミーティングを始めるで」  
因みに今ミーティングルームに集まっているのは和葉さん達4人と  
私とフェイトちゃんとヴォルケンリッターの4人です。

は「実は先日、ある場所で『ロストログア』が発見されたんや」

修「はやて。『ロストログア』って何？」

フェ「ロストログア。今では滅んでしまった古代文明の技術によって作られた遺産。その中には世界を軽く滅ぼすことが出来る物もある」

恭「そのロストログアを回収し、保管する。それが機動六課。言い換えれば時空管理局の仕事と言ったところか」

な「そう言うことです。ところではやてちゃん。そのロストログアが見つかった所ってどこ？」

は「みんなも良く知ってるよこや！」

和「・・・はやて。それは俺たちの生まれ故郷か？」

は「和葉さん。答え言うの早いわ〜」

奏「と言うことは正解みたいだね？」

は「そうや。今回の出張任務先は第97管理外世界『地球』の海鳴市や！」

な「本当！？はやてちゃん」

フェ「はやて。その出張任務は何時からなの？」

は「明日からや。参加者は修也君たち4人とうちとなのはちゃんとフェイトちゃんとリインとFW4人やヴィータたちはいざって時のために六課に待機しといてな？」

ヴィ「あたしも行きたかったな〜」

シ「ヴィータ。主はやてにも考えがあるのだから仕方ないだろう？」

は「明日午前9時に転送ポートに各自集合や、FWたちにはそれぞれの隊長が伝えること。ええな？」

な・フェ「了解」

は「ほんならこれでミーティングは終了や。お疲れさん」

なのは サイドエンド

和葉 サイド

今日の仕事が終わって俺たちはそれぞれの部屋に移動した。

和「午後9時か。寝るにはまだ早いか・・・」

ド【これからどうするんだ？】

和「そうだな・・・筋トレでもやるか。ドモン、カウントしてく

れ。」

ド【分かった】

俺は『片手腕立て』を始めた。

15分後・・・

ド【298・299・300】

和「ふう。少し休むか」

コンコン・・・

和「ん？誰だ？」

俺は汗を拭き、上着を着て入り口の所に行くと、キヤロが寝間着姿で立っていた。

和「キヤロ？どうした？こんな時間に」

キ「すみません和葉さん。実は一人ぼっちで心寂しかったです」

和「キヤロの部屋にはエリオがいたと思うが？」

キ「エリオ君は恭二さんの所に行くって出て行っちゃいました」

和「なるほどな。取り敢えず部屋に入るか？」

キ「あ、はい。失礼します」

俺はキャラを部屋に招くと、冷蔵庫からジュースを取り出し、持って来た。

和「ほら。飲むか？」

キ「あ、はい。いただきます」

和「しかし、エリオもエリオだな。勝手に出て行くとは」

キ「『兄さんともっと話がしたい』って飛んで行っちゃいましたけど、何かとても楽しそうでした」

和「そうか」

キ「・・・あの。和葉さん。一つお願いがあるんですけど？」

和「ん？どうした？」

キ「これから和葉さんのこと『お兄ちゃん』って呼んで良いですか？／／／」

和「な、何!？」

キ「あう／／／」

和「・・・何故だ？キャラ」

キ「エリオ君が恭二さんのことを『兄さん』と呼んでいるのが何だか羨ましくなってしまうて。その・・・」

和「（それもそのはずだな。キャラとエリオはまだ10歳。親や家族に甘えたい年齢だ）・・・分かった」

キ「え!？」

和「キャラが俺のことを兄さんと呼びたいんだろ？」

キ「は、はい!! えっと・・・お、お、お兄ちゃん／／／」

和「・・・良く言えたな。偉いぞ、キャラ」

俺はキャラの頭を優しく撫でるとキャラは顔を赤らめてうつむいてしまった。

キ「あうっ／／／／／」

和「さあ。明日は出張任務だから早く部屋に戻って休むんだ。エリオもそろそろ帰ってきているだろう」

キ「あ、はい」

和「敬語はいらないぞ? キャロ」

キ「え?」

和「兄妹で敬語は不自然だと思うが?」

キ「・・・うん。ありがとうお兄ちゃん。じゃあお休み」

和「ああ。お休み、キャラ」

キャラは嬉しそうに自分の部屋に戻っていった。

ド【良かったのか？カズハ】

和「何がだ？」

ド【キャラがお前の事を兄さんと呼ぶそうだが】

和「構わない。フェイトから聞いていたが、キャラはあの歳で一族から追放され、ずっと孤独だったはずだ。だから俺が助けてやりたい」

キャラの一族『ルシエ一族』は竜を従わせることができる希少な種族だった。だがキャラは10歳で竜を従える事が出来たが、それが忌むべき力と恐れられ、一族から追放され、フェイトの元にやってきたそうだ。

ド【まさかお前・・・ロリク】

和「それ以上言ったらドモンでも許さないからな・・・（ゴゴゴゴ）」

ド【わ、分かった（この気迫。師匠と同等だな）】

さて、明日から出張任務か・・・気を引き締めないとな。

和葉 サイドエンド



## 第十六話 出張任務・合流（前書き）

何だか和葉が主人公になってる・・・ではどうぞ

## 第十六話 出張任務・合流

奏 サイド

今日は地球に主張任務だ。僕は指定された転送ポイントに移動していた。

な「あ、おはようございます。奏さん」

フェ「おはよう、奏」

奏「おはよう、なのは、フェイト」

な「早いんですね。まだ集合の30分前ですよ？」

奏「大切な行事は30分前行動。これが僕の心がけだよ」

和「その心がけは立派だな、奏」

な「あ、和葉さん。おはようございます」

フェ「恭二もおはよう」

恭「おはよう、フェイト」

修「あれ？はやてはまだ来ていないの？」

な「はやてちゃんなら、リインちゃんと準備があるから少し遅れるって言っていましたよ？」

修「そうか。なら、気長に待つか」

15分後・・・

しばらくするとFW達が荷物を抱えて、やってきた。

ス「おはようございます!! 奏さん」

奏「おはよう、スバル、ティアナ」

テ「おはようございます」

エ「おはようございます、兄さん」

恭「よく眠れたか? エリオ」

エ「はい!!」

和「おはよう、キャラ」

キ「おはよう、お兄ちゃん」

シーン・・・

和「ん? どうした?」

フェ「和葉。今キャラが・・・」

奏「まさか和葉にそんな趣味が・・・（小声）」

和「ちよつと待て！奏！！今は聞き捨てならない台詞だぞ！？」

恭「まあ、その事はさておき。何故キャラが和葉の事を兄と呼んでいるのだ？」

和「エリオが恭二の事を兄さんと呼んでいるように、キャラも俺の事を兄さんと呼んでいる。ただそれだけだ（本当の理由は話さない方が良さだろう）」

キ「あう／＼／／／」

和「キャラ。お前は俺の大切な妹だ、恥ずかしがることはない」

そう言うと和葉はキャラの頭を優しく撫でた。

キ「・・・うん。ありがとう、お兄ちゃん」

和「ふっ」

キ「えへへ／／／」

恭《こうして見ると本当の兄妹のように見えるな？フェイト》

フェ《キャラが・・・キャラが・・・》

恭《ダメだ。こりゃ・・・》

は「はっは／＼。良いもん見せてもらうたで？」

修「はやて！？何時からいた？（今はやてに狸の耳と尻尾が見えるのは俺だけだろうか？）」

は「今や。この風景を六課に張り出したらみんなどう思うやろな〜」

キ「あう〜／＼／／」

奏（はやて。それは地雷だよ！！）

ドッカーン！！！！

和「・・・はやて（ゴゴゴゴ）」

は「は、はい！！」

和「俺は何をされても構わないが・・・キャロに不快な思いをさせたら・・・どうなるか・・・分かっているよな？（ゴゴゴゴ）」

は「ご、ごめんなさい。もう二度と言いません！！（ガタガタ）」

和「・・・良し」

和葉はそう言うのと殺気を引っ込めて、何時も通りになった。

な「か、和葉さん。すごく恐かったよ〜」（小声）

フェ「私も久しぶりに恐怖を感じたよ・・・」

ス「和葉さんがすごく恐かったです！奏さん（ガタガタ）」

奏「あれははやての自業自得だよ」

テ「私もあれは、はやて部隊長が悪いと思います」

恭「はやて。狸になるときは時と場合を考えないといけないと思うが？」

は「うわーん、リイン。みんながうちをいじめるわ〜」

はやては一緒に来たキャラと同じ位の身長の子に寄りすがった。でもこの子見たこと無いな・・・

？「あれははやてちゃんがどう見ても悪いです！反省してくださいですー！」

修「待って、はやて。今その子を『リイン』と言った？」

は「ん？ああ。そう言えば、修也君達とFW達は初めて見るんやったね。そうや。この子はリインや」

エ「でもリイン曹長は何時もこれ位でしたよね？」

エリオは両手で長さを示した。

リ「えつとですね。この状態になると何時もより多くの魔力を消費してしまつんです。だから何時もはあの小さい状態にいるんですよ」

ス「じゃあ小さいままで良いんじゃないですか？」

奏「スバル。今から行くところは魔法が存在していないんだ。そんな所で30cm位の女の子が空を飛んでいたらどう思う？」

ス「あ！なるほど！」

テ「それくらい分かるでしょ？バカスバル！」

和「はやて。そろそろ出発しなくて良いのか？」

は「ああそうやった。ほんなら行くで？」

僕たちは転送ポイントから地球へと向かった。

~~~~~

僕たちがたどり着いたのは綺麗な湖が見えるコテージだった。

奏「ここにロストログアがあるの？はやて」

は「違うで、奏さん。ここで現地協力者と合流するつもりや」

な「元気にしてるかな？アリサちゃんとすずかちゃん」

フェ「楽しみだよ」

すると、一台のリムジンがコテージの近くに止まり、その中から金髪の女性と紫色の髪をした女性が出てきた。

？「なのは！フェイト！はやて！」

は「アリサちゃん！すずかちゃん！久しぶりやな！」

す「久しぶりだね、みんな」

な「それじゃあ紹介するね。ここの現地協力者の」

ア「アリサ・バニングスよ」

す「月村すずかです。よろしくね？」

FW4人「「「「よろしくお願いします！！」「」」」

バニングスさんと月村さんはFWたちに挨拶を終えると、僕たちの事が気になったのかこつちを向いた。

ア「この人たちもあんた達の教え子？」

な「にやはは。アリサちゃん。和葉さん達は民間協力者だよ」

奏「僕は『紅 奏』。よろしくね」

和「俺は『白銀 和葉』。よろしく頼む」

恭「私は『黒原 恭二』。覚えておいて貰おう」

修「俺は『緑川 修也』。よろしくな」

ア「よろしく。あんたたちの方が年上みたいだからあたしのことは『アリサ』で良いわよ」

す「よろしくお願いします。私も『すずか』って呼んで下さい」

4人「「「「分かった（よ）」「」「」」

するとアリサが和葉に詰め寄り、和葉の体をじろじろと見始めた。

和「何だ？俺の体に何かついていているのか？」

ア「あんたが白銀和葉だったわね？ちよつとこつちに来て」

和「ん？」

そう言っていると和葉はアリサに連れられて、人気のない所に行ってしまった。

な「どうしたんだろう？アリサちゃん」

フェ「アリサの顔の表情。いつもと違ってた」

奏「とにかく今は2人で話をさせてあげよう？」

は「せやね。まだ時間は大丈夫と思うし」

す「アリサちゃん。もしかして・・・」

恭「すずかは何か知っているのか？」

す「・・・多分大丈夫だと思います。アリサちゃんは怒っている訳ではないと思いますから」

僕たちは二人を待つことにした。

奏 サイドエンド

和葉 サイド

俺はアリサに連れられて人気のない所までやってきた。

和「こんな所に俺を連れ出して何のつもりだ？俺は君に恨まれるようなことは何もしていないが？」

ア「・・・8年前」

和「ん？」

ア「8年前。あんたがなのはを助けてくれたの？」

和「8年前・・・ああ。ガジェットからなのはとヴィータを助けた時の話か」

ア「・・・どうなのよ」

和「確かに。俺はなのはの命を助けたが？」

ア「やっぱり」

するとアリサは俺に再び詰め寄り・・・

ア「ありがとう。なのはを助けてくれて」

と涙を流しながら俺に頭を下げてきた

ア「あんたがいなかったらなのは・・・なのはは!!」

和「それ以上は言わなくて良い」

ア「・・・分かったわ。和葉」

和「何だ?（いきなり呼び捨てか。まあ構わないけどな）」

ア「あんたにお願いがあるの。・・・なのはと仲良くしてあげて? 問題が起ると何時も自分の力だけで解決しようとするから。あんなになら任せられる・・・」

アリサは俺に真剣な眼差しで問いかけてきた。余程なのはのことが大切に思っていることを感じる事ができた。

和「・・・分かった」

ア「・・・べ、別に感謝してる訳じゃないからね!!」

和「（こういうのを確かツンデレと言うんだっただか?）ふっ。そう言うことにしておく（笑顔）」

ア「っ!!」／／／（ああ!!もう!!和葉って何て魅力的な笑顔もってるのよ!!・・・見惚れてしまったじゃない／／／」

和「どうかしたか?アリサ」

ア「何でもないわよ!!」／／／・・・さあ。早くなのは達の元に戻

るわよ!!」

俺たちはその後なのは達と合流して、スターズとライトニングに別れてセンサーをつけて回ることとなった。スターズは俺と奏。ライティングは恭二。修也ははやてと回ることとなった。しかし何故アリサは顔を赤くしていたのだろうか？

和葉 サイドエンド

第十七話 出張任務・訪問

奏 サイド

奏「これでセンサーの設置は完了？なのは」

な「はい。これで最後です」

和「しかし。地球にロストログアが出てくるとは不思議な話だ」

ス「これからどうするんですか？」

テ「コテージに戻るんですか？」

な「うーん。あ！そうだ。ちょっと寄りたい所があるんだけど良いかな？」

和「何処に行くつもりだ？」

な「久しぶりに私の家族に会いたいと思いましたから」

奏「僕はかまわないよ？」

ス「私もなのはさんの家族にあってみたいです！！」

テ「私もです！！」

和「みたいだぞ？なのは」

こうして僕たちなのはの家族が営んでいる喫茶店『翠屋』を目指した。

~~~~~

奏「ここが『翠屋』・・・オシャレな店だね？なのは」

な「海鳴市では結構人気があるんですよ？」

和「ほう。それは楽しみだな」

ガチャ・・・カランコロン

まずなのはから入り、スバル、ティアナ、そして僕たちの順番で店の中に入った。中には若い男性と女性が店番をやっていた。

？「いらつしやいま・・・あら！なのは！おかえりなさい」

？「なのは！いつ帰ってきたんだ！？」

な「えへへ。ただいま！お母さん。お父さん」

奏・和（「若すぎでしょ（だろ）？この夫婦・・・」）

な「スバル、ティアナ。この人たちが私のお父さんとお母さんだよ？」

ス「初めまして、スバル・ナカジマです」

テ「私はティアナ・ランスターです。なのはさんにはお世話になっ

ています」

桃「私はなのはの母で『高町 桃子』です」

士「私は『高町 士郎』だ。今日はわざわざ来てくれてありがとう」

な「あれ？お兄ちゃんとお姉ちゃんは？」

桃「二人とも今日は出かけているのよ」

士「それはそうと、なのは。後ろの男性二人は誰だ？」

士郎さん・・・何故そんなに殺気を僕たちに当てているんですか・・・？

な「この人達は私たちの民間協力者の・・・」

奏「僕は『紅 奏』です。よろしくお願いします」

和「俺は『白銀 和葉』です。よろしくお願いします」

士「っ！！君が・・・」

桃「白銀和葉君・・・」

僕たちが自己紹介を終えると、士郎さんと桃子さんが和葉をじろじろと見始めた。

士「なのは。少し和葉君を借りてもいいかね？」

な「え？それは和葉さんに聞かないと」

和「俺に何か用があるみたいですね・・・分かりました」

桃「ごめんなさいね」

そう言うと和葉は士郎さんと桃子さんに連れられ、店の奥に行ってしまっただ。

ス「どうしてんでしょうか？和葉さん」

テ「何かあったんでしょうか？」

な「アリサちゃんの時と同じですね？奏さん」

奏「うん」

僕たちは和葉を待つことにした。

奏 サイドエンド

和葉 サイド

俺は士郎さんと桃子さんに連れられて、テーブルに座った。

和「話というのは何なのですか？」

士「・・・君がなのはを助けてくれたのかね？」

和「・・・もしかして8年前の事ですか？」

桃「その事を知っていることは・・・」

和「はい。俺がなのはを助けてました」

士・桃「「やっぱり」」

そう言うのと士郎さんと桃子さんは俺に頭を下げてきた。

士「ありがとう。君がいなかったらなのは・・・」

和「その先は言わなくて構いません。・・・あと俺の事は良いですから、なのは事を褒めてあげてください。あの怪我から復帰するまで血の出るようなりハビリをやったと思いますから」

桃「もちろん。なのはのことは褒めたわ。でも唯一あなたにお礼を言っていないかったから」

士「私たちにできることがあれば何でも言ってくれ！君はなのはの命の恩人だ！！」

和「そうですね。・・・では俺にこの翠屋で一番美味しいケーキとコーヒーをご馳走してください。それで帳消しです」

桃「そんな事で良いの？」

和「むしろそれしか思いつきません」

士「分かった。ではこの店自慢のケーキとコーヒーを出そう！！みんなの所で待っていてくれないか？」

和「分かりました」

俺は奏達の所に戻った。

士「桃子」

桃「どうしました？士郎さん」

士「和葉君になら、なのはを任せても大丈夫だと思うが桃子はどう思う？」

桃「うふふ。私も士郎さんと同じ考えです」

その後俺たちはケーキとコーヒーをご馳走になった。ここの店が有名になるのはおかしくない位の出来前だった。

~~~~~

な「じゃあお父さん、お母さん。私たちそろそろ行くね？」

奏「ありがとうございます。ケーキとても美味しかったです」

和「わざわざありがとうございます」

ス「美味しかった〜ここのケーキ」

テ「あんたは一人で食べ過ぎよ！！バカスバル！！」

士「あはは。構わないさ」

桃「また来て下さいね？」

ス・テ・奏・和「「「はい！！」「」「」

士「今度来るときはなのはが和葉君を彼氏としてここに連れてくるかもしれないな」

な「お、お、お父さん！な、何を！？／／／」

和「士郎さん。俺じゃもつたいないですよ」

桃「そんなことはありませんよ？和葉さんはなのはにピッタリな理想の男性だと思いますよ？」

な「お母さんまで／／／」

その後俺たちは士郎さんと桃子さんに別れの挨拶をして、コテージに戻った。恭二達もすでにコテージに戻っており、バーベキューの準備をしていた。そして夕食が終わると全員でスーパ―銭湯に行くこととなった。

和葉 サイドエンド

第十八話 出張任務・結末（前書き）

遅れて申し訳ありません。学校が忙しく、これからこれ位のスピードで更新していきます。あと今回は戦闘は省略しました。ではどうぞ

第十八話 出張任務・結末

修也 サイド

俺たちは夕食を済ませて、この町の名物の一つでもある『スーパー銭湯』に来た。今居るのは俺たち4人と六課のメンバーとアリサとすずかだった。

修「銭湯か・・・来るのは初めてだな」

和「俺もだ」

ス「奏さん。銭湯って何ですか？」

奏「簡単に言えばお風呂屋かな」

は「ほんならうちがお金を払っとくからみんなは先に行っててええで」

修也 サイドエンド

フェイト サイド

~~~~~

キ「エリオ君。一緒に入ろう？」

エ「ええ！？でも僕は男の子だよ！？」

キ「ほら。あれ見て？」

エ「ん？」

――女性の湯の男の子の入浴は11歳未満までとします――

エ「・・・」

キ「エリオ君、10歳♪」

エ「で、でも。他の女性達に迷惑が・・・／／／」

フェ「そんなことないよ？エリオ」

な「そうだよ。私たちは何とも思わないよ？」

ス「エリオもこっちにすればいいじゃん？」

エ「え、えつと／／／・・・やっぱり僕は兄さん達と入ってきます  
！！では！！」

そう言つとエリオは恭二達の元に走って行ってしまった。

ア「結局向こうに行っちゃったわね？」

す「無闇に連れ込もうとしてもエリオ君に悪いと私は思うよ？」

フェ「そうだね。でもちょっとショックかな・・・」

キ「・・・」

テ「どうしたのよ？キャロ」

キ「っ！すみません。何でもないです」

私たちは私たちでお風呂に入ることにした。

フェイト サイドエンド

恭二 サイド

恭「どうだ？エリオ。痛くないか？」

エ「はい。大丈夫です、兄さん」

私はエリオの体を洗ってやっているが力が入りすぎていないか心配だった。こう言ったスキンシップも大切なことだと思う。

恭「よし、これで良い。エリオは奏達と湯船に入っていてくれ。私もすぐに行く」

エ「分かったよ、兄さん」

エリオが奏達の元に行き、私も体を洗い、奏達の元に行った。

エ「・・・」

和「ん？どうした？エリオ」

エ「あ、いえ。兄さん達の体って凄く筋肉質なんだなって思って

たんです」

奏「僕たちは鍛えていたからね。エリオも何時かなと思うよ?」

修「まあ。かなり時間はかかると思うけどね」

恭「焦ることはない。時間をかけてゆっくり鍛えて行くんだエリオ。分かったか?」

エ「はい! 兄さん!」

私たちがたわいない会話をしていると・・・

キ「エリオく〜ん。お兄ちゃ〜ん」

男性5人「くくくくえ(ん)?」「くくく」

体をタオルで巻いたキャロが入ってきた。それを見たエリオはゆでだこのように真っ赤になった。

エ「キ、キ、キャロ!? ど、どうしてここに!?!? ここ男湯だよ!?!?  
//」

キ「えへへ。男の子が女湯がオツケーなら。女の子も男湯に入っても良いってことだよ?」

和「なるほどな。ところでキャロ。何故、男湯こいに来たんだ?」

キ「エリオ君を迎えに来ました」

工「ええ！？僕は行かないってさっき言ったよ？」

奏「エリオ。君はまだ子どもなんだから甘えたい時に甘えた方が良いと思うよ？」

和「俺もそう思う」

修「右に同じ」

恭「・・・」

工「兄さん！！」

恭「・・・すまないエリオ。今回は奏に同感だ」

工「そ、そんな～～」

キ「それじゃあ女湯に行こう。じゃあね、お兄ちゃん」

キヤロはエリオを女湯に連れて行った。・・・助けた方が良かったのだろうか？

奏「僕はそろそろ上がるけど。みんなどうする？」

和「俺ものぼせたみたいだ。俺も上がる」

修「俺も堪能したから上がるぜ」

恭「では私は露天風呂に行ってくる」

そう言つと私は奏達と別れて露天風呂に向かった。しかし私は一つの注意事項に目が行き届いていなかった。

――露天風呂は混浴です――

恭二 サイドエンド

フェイト サイド

な「ふう。気持ちいいね」

は「せやね」

フェ「うん」

ス「あはは。ここのお風呂って広い」

テ「こら！泳がない！バカスバル！！」

F W たちもここのお風呂を堪能しているみたいだった。

フェ「じゃあ私は露天風呂に行ってくるね？」

私はなのは達と別れて外に出た。そして風呂には一つの人影が見えた。

フェ「誰か居るのかな？湯気でよく見えない」

私は気になって近づいてみると・・・

恭「・・・なっ！！フェイト！？／／／」

フェ「えっ！？き、恭二！？／／／」

恭「まさか・・・露天風呂は混浴なのか！？すまない！フェイト。私はもう上がる！」

フェ「あ！待って！」

フェイト サイドエンド

恭二 サイド

そう言うతోフェイトは私の隣にやってきて私の右腕を確かめるように触ってきた！

フェ「うわあ。やっぱり恭二は体が筋肉質なんだね」

恭「フェ、フェイト！？い、いきなり何を・・・」

フェ「あ！ごめん！いきなり右腕を触ったりして・・・／／／」

恭「まあ。少し驚いたが私は大丈夫だ。・・・フェイト」

フェ「何？恭二」

恭「今更だが、君とエリオと出会ってから5年くらい会っていないかったが、問題は無かったか？」

フェ「うん。大した問題は無かったよ？」

恭「そうか。しかしこれからは安心して良い。何があっても君とエリオやその仲間達は私が守ってみせる」

フェ「じゃあ私も恭二に何かあつたら私が守ってあげる」

恭「ありがとう、フェイト」

フェ「・・・恭二／＼」

恭「・・・フェイト／＼」

私とフェイトは見つめ合い、キスを交わそうとするが・・・

恭「・・・何時までそこで見ているつもりだ？はやて」

フェ「え！？」

は「あちゃゝ。ばれとつたんか」

物陰から狸の耳と尻尾を生やしたはやてが出てきた。

は「もうちょつとでええとこを撮れとつたんやけど・・・」

恭「・・・はやて。今までの映像をもし六課に流したりすれば・・・  
(ゴゴゴゴ)」

フェ「O H A N A S H Iだからね？はやて(笑顔)」

は「は、はいゝゝ(ダラダラ)」

その後日中に仕掛けておいたセンサーに反応があり、総動員でロス  
トロギアを封印した。そして今後の事もあり、私は今日中にミッド  
チルダに帰還した。しかしそのロストトロギアがドラ。エに出てくる  
ス。イムみたいだったのはここだけの話だ。

恭二 サイドエンド

## 第十九話 ホテル・アグスタ 前半

奏 サイド

僕たちが地球から帰ってきて一週間過ぎ、今回の任務は『ホテル・アグスタ』で行われるオークションの護衛だった。僕たちはヘリの中でその護衛内容をはやてから聞いていた。今回出動するのは僕たち4人とヴォルケンリッター4人とFW4人と隊長3人だった。

は「今回の任務は知つての通りホテル・アグスタで行われるオークションの護衛や」

修「何故オークションだけでこんなに大人数で出動しなければなら  
ないんだ？はやて」

な「理由の一つはそのオークションにロストログアが含まれている  
からです」

和「何！？そんな物をオークションに出して、犯罪ではないのか？」

フェ「管理局が許可しているロストログアなら大丈夫だよ？でもそ  
のロストログアを狙ってくる奴も居る」

するとモニターが出てくると紫色の長髪の男性が映し出された。

恭「フェイト。この男性は？」

フェ「広域次元犯罪者『ジェイル・スカリエッティ』。こいつがガ  
ジェットを作つてロストログア『レリック』を集めている」

奏「なるほど。この機会にロストロギアをこの男が狙ってくる可能性があるから僕たちが護衛にあたるってことかな？（この男性・・・天界で見た映像で映っていた奴だよね）」

は「そう言うことや。みんな、よろしく頼むで？」

FW4人「「「はい！！」「」」」

するとキャロが何かに気づいたみたいにシャルさんに尋ねた。

キ「あの。シャル先生。その7つの箱って何ですか？」

シャ「あ、これ？これは隊長達3人と修也さん4人のお仕事着よ」

奏・和・恭・修「「「え？俺（僕）たちもですか？」」」」

は「そうや。色は向こうで4人で選んでもらうで？」

修「・・・はやて。そんな話。全く聞いていないよ？」

は「まあ。ええやないか、修也君。減るもんでもないし」

奏・和・恭・修（（（この狸め・・・）））

奏 サイドエンド

なのは サイド

私たち3人がドレスに着替えて、受付のロビーで和葉さん達を待つ

ていました。

な「楽しみだね。和葉さん達のタキシード姿」

は「そら、なのはちゃんは和葉さんに惚れとるもんなん」

な「そ、そう言うはやてちゃんだって修也さんのこと好きなんですよ？／＼／＼」

は「う、うちは／＼／＼．．．そんなことよりフェイトちゃんも恭二さんに惚れとるんやろ？この前だってあんなこと．．．」

フェ「は、はやて。そのことは秘密にしておいてって言ったよね？／＼／＼」

な「フェイトちゃん。あの事って何？」

フェ「な、何でもない。気にしないで？なのは」

な「そう？なら良いけど．．．」

私たちが話していると．．．

和「すまない。遅くなった」

恭「しかしタキシードか．．．」

奏「これを着たのは成人式以来だよ」

修「俺もだよ」

それぞれのタキシードを着こなしている和葉さん達が私たちの元にやってきました。奏さんと恭二さんは黒と白のタキシード。和葉さんと修也さんは真っ白のタキシードを着ています。その姿に周りの女性客は和葉さんたちに釘付けになっていました。勿論私たちもです／＼／

な「うわあ。和葉さん達似合いすぎだよ／＼／」

は「《うちが選んだんやけどこれは想像以上や／＼／》

フェ「《これが・・・年上の魅力なのかな？／＼／》

奏「ところで振り分けはどうする？僕の考えは僕がロビーで待機。和葉となのは。恭二とフェイト。修也とはやて。この振り分けが一番ベストと思うよ？」

和「問題ない」

恭「私もそれで構わない」

修「はやて達はどうか？」

な「あ！はい。私もそれでオッケーです」

は「うちも良いで？」

フェ「私も問題ないよ」

和「決まりだな。では、やるか？恭二、修也」

恭・修「「ああ（おう）」」

すると和葉さんは私の前に、恭二さんはフェイトちゃんの前に、修也さんははやてちゃんの前に立ち止まりました。

な・フェ・は「「「??」」」

和・恭・修「「「どうか私たちにエスコートさせて貰えませんか？」」」

和葉さん達がひざまず跪き、右手を私たちに差し伸べてきました。答えは決まっています

な・フェ・は「「「喜んで」」」

私たちはそれぞれに別れて、デート・・・ではありませんでした、警備を開始しました。

なのは サイドエンド

ティアナ サイド

ス《今日は隊長たちも出撃するなんてね》

ティ《・・・そうね》

ス《どうしたの？ティア》

ティ《何でもないわよ。じゃあ切るわね》

ス《うん。ティアも頑張ってね》

スバルとの念話が終わると私は溜め息をついた。

て（・・・なのは隊長。フェイト隊長。八神部隊長。そしてヴォルケンリッターの人たちは全員リミッターつきであのニアSランクの強さ・・・FWでもエリオはあの歳で戦闘クラスB。キャロもレアスキルの『竜魂召還』。スバルも突破口を切り開く強さを持っている。そして何より民間協力者の奏さんたち4人。あの人達は接近戦闘は隊長達に勝つほどの力を持っている・・・凡人なのは私だけ・・・でもそんな関係ない！！私の・・・いや。ランスターの弾丸に貫けないものはないってこと！！）

するとシャルマさんから連絡が入った。

シャ「みなさんに通告します。クラールヴィントに南からのガジエツトの機影が感知しました。各自防衛ラインを突破されないように注意してください！！」

ティ「（この戦いでそれを証明してみせる！！）行くよ！！クロスミラーシュ！！」

クロス【イエッサー】

私はバリアジャケットを展開してガジエツトの迎撃に向かった。

ティアナ サイドエンド

## 第二十話 ホテル・アグスタ 後半

奏 サイド

奏「来たか!!」

ガジェットたちが現れたことを聞いた僕は和葉達に念話で伝えた。

奏「僕は外に出てガジェットの迎撃に向かうから、和葉達3人は館内の人たちの護衛を任せる!!」

和・恭・修「分かった!!」

奏「師匠!行きます!!」

不敗「行くぞ!カナデよ!!」

奏・不敗「マスター!セットアップ!!」

僕は外に出てデバイスを起動させ、背中のバーニアを吹かして、迎撃に向かった。そしてヴィータがガジェットの群れに突っ込んでいたからこれを援護することにした。

奏「てやああああ!!」

ヴィ「奏!!」

奏「ヴィータ!!大丈夫か!?!」

ヴィ「あたしは何ともないけど、こいつら機能が以前より格段に上がっていやがる!!」

奏「何!？」

僕はガジェットを見ると、目のようなものが普段は黄色だけど赤くなっていた。そして銀色に輝く正六角形の物体がガジェットの体を取り付いていた。

ヴィ「何だ?あの銀色に光っているあれは」

奏「まさか・・・『D G細胞』!!」

ヴィ「『D G細胞』って何だ?奏」

奏「あれは『自己再生』『自己増殖』『自己進化』。この3つの理論を強めることが出来る代物だ。だがあれに感染してしまうと我を忘れ、敵味方構わずに攻撃してしまう恐ろしい『兵器』だ!!」

ヴィ「何だと!?!あたしらに倒すことは出来んのか?」

奏「隊長クラスの戦闘能力なら問題はないが、FW達にはかなりきついと思う。俺がバックアップに回りたいがここを野放しにする訳には・・・」

シ・?「その心配は無用だ!!」

声がする方を向くバリアジャケットを身に纏ったシグナムと狼の尻尾と耳を生やした見慣れない男性が僕たちの元に飛んできた。

ヴィ「シグナム！ザフィーラ！」

奏「シグナムは分かるが、この男がザフィーラだと！？」

ザ「奏達にこの姿はさらしていなかったな」

シ「お前達の話は聞かせて貰った。ここは私とザフィーラで押さえる。だからお前達はFWのバックアップに向かってくれ！！」

奏「・・・分かった。しかし油断するんじゃないぞ！！」

シ・ザ「分かってる！！」

奏「ではFWたちの元に急ぐぞ！ヴィータ！！」

ヴィ「分かった！！」

僕とヴィータはFWたちが集まっているポイントに急いだ。

奏 サイドエンド

ティアナ サイド

ス「ティア〜〜。こいつら動きが速すぎるよ〜〜！」

テ「弱音を吐かない！バカスバル！！でも確かに幾ら何でも早すぎるわね。リニアレールの時と比べものにならない。スバル、相手の動きを解析したいから牽制してくれない？」

ス「了解、ティア。はああああ！リボルバー！シュート！！」

スバルのリボルバーシユートはガジェットに飛んでいったけど、ガ  
ジェットはAMFを展開してそれを霧散させた。  
アンチマギングフィールド

テ「やっぱりAMFも強くなってる！」

ス「ねえ、ティア。ガジェットの体の隅にくっついて銀色に光って  
いるあれって何だろうね？」

テ「もしかしてあれが原因？」

奏《スバル！ティアナ！聞こえるか！？》

ス《奏さん！？》

テ《どうしたんですか？奏さん》

奏《ガジェットの体に銀色に光っている物体がついていないか！？》

テ《あ、はい。ついています》

奏《その物体に絶対に触れるな！！》

ス《え！？》

――DG細胞について説明中――

ス《こわっ！！》

奏《良いな！？そいつに触ったら一貫の終わりだと思え！！俺とヴ

イータが今そこに向かっている。それまで耐えろ！」

テ「分かりました！！」

奏「では切るぞ！」

テ「スバル！聞いたわね？クロスシフトで時間を稼ぐわよ！！」

ス「分かった！！」

テ「行くわよ！！クロスミラージュ！！」

クロス【カートリッジ・ロード】

ガシユン！！ ガシユン！！

私がカートリッジ・ロードをいつもより多めにしているとシャマル先生から通信が入った。

シャ「ちよつと、ティアナちゃん。そんなにカートリッジ・ロードして大丈夫？」

テ「大丈夫です！行くわよ！スバル！」

ス「オツケー！！」

テ「クロスファイアー！！シュート！！」

私の背後に出てきた6〜7個の魔力弾はガジェットを次々と貫いていった。しかし・・・

テ「っ！！スバル！！避けて！！」

ス「えっ！？」

私は魔力弾の一つを制御出来ずに、スバルの方に飛んでしまった。  
スバルは弾がぶつかると思い、目を閉じた。

奏「はあああ！！！！」

テ「え！？」

ティアナ サイドエンド

奏 サイド

バチイイン！！！！

僕は『マスタークロス』で弾を弾きとばして、スバルを守った。

ヴィ「ティアナ！！このバカ！！無茶した挙げ句に味方に撃つか！！」

ス「ヴィータ副隊長。これは作戦の内です・・・」

奏「スバル。味方を傷つけてまで成功させようとすることは作戦とは言わない！！」

テ「っ！！・・・すみませんでした」

ヴィ「もういい！てめえらはひっこんでろ！！」

奏「ヴィータ。それくらいにしておくんだ、無闇に怒鳴っても彼女たちの自信を奪うだけだ」

ヴィ「わ、分かった」

僕とヴィータはガジェットの団体に戦いを挑んだ。

奏「ヴィータ。こいつらを一点に集めてくれないか？」

ヴィ「何か作戦があるのか？」

奏「集まった所を俺の技で吹き飛ばす！！」

ヴィ「分かった！！アイゼン！！」

アイ【シュワルベ・フリーゲン】

ヴィータは複数の鉄球を上手く操り、ガジェット達を牽制し、一点に集めた。

ヴィ「良いぜ！！奏！！」

奏「感謝する！ヴィータ・・・はあああ！！流派東方不敗が最終奥義！！・・・石破！！天驚拳！！」

僕の石破天驚拳はガジェットたちを容易く飲み込み、爆散させた。

ヴィ「す、すごい。何だよ今の技は」

奏「ここはもう大丈夫か。エリオとキャラは大丈夫だろうか？」

恭《奏。館内の一般人の誘導が終わった。これから私たちはエリオとキャラの元に向かう》

奏《分かった。3人とも聞いてくれ！今回のガジェットにはDG細胞が取り付いている！気をつける！》

和・恭・修《《分かった！！》》

その後ガジェットの増援もなくこの事件は幕を閉じることとなった。

奏 サイドエンド

アグスタが見える丘の上

？「流石だな、あいつら」

？【今回は俺たちが出なくて良かったのか？】

？「今回は様子見だ、今から嫌と言うほど戦えるさ、ミケロ」

ミ【あいつらには恨みがあるからな、はやくなぶり殺しにしたいぜ】

？「今日はもう帰るぞ。奴らの戦闘能力が知れただけでも大きな成果だ」

赤髪の男と翼がついたネックレスのようなデバイスがその場から消えた。



## 第二十一話 無理と無茶

奏 サイド

テ「はあ、はあ、はあ」

奏（今日もティアナは自主練か・・・）

アグスタの任務が終わって六課に帰ってきて早二日、変わったことがあるとすればティアナが自主練習の時間を大幅に伸ばして、夜遅くまでやっていることだ。

奏《先日のミスショットを気にしているのでしょうか？師匠》

不敗《仕方あるまい。あのような失態を犯してしまえば焦るのはお前でも分かると思うが？》

奏《はい。でもこのままではティアナは・・・》

不敗《わしから言えるのはあの小娘がやっていることは己の体を痛めつけているだけだ》

奏「・・・」

――回想――

奏「なのは。少し良いかな？」

な「どうしました？奏さん」

奏「・・・ティアナのことなんだけどね。この頃何だか焦っているように見えるんだ。ティアナに聞いてみたんだけど答えてくれなくて・・・上司である、なのはなら何か知っているかなって思ったからだよ」

和「俺も気になるな・・・何故あそこまでやるのか」

な「・・・分かりました。思い当たる所があります」

僕たちは誰もいない会議室に移動した。そして僕たちの目の前にモニターが表れ、1人の男性が映し出された。

和「なのは。彼は？」

奏「・・・何だかティアナに似ているような。もしかして・・・」

な「奏さんが思っている通りです。彼はティアナのお兄さんで『ティーダ・ランスター』。階級は一等空尉でした」

和「ほう。一等空尉と言うことはなのはと同じ階級か・・・」

奏「・・・なのは。『でした』って言うことは」

な「・・・ティーダさんは数年前に殉職しました」

和「・・・」

奏「お兄さんを亡くして辛い思いをしたのは分かるけど。それが今回の事に関係が？」

な「・・・ティードさんの葬儀の時に彼の上司が彼の功績を侮辱したそうです」

和・奏「「っ!」!」

な「『出来損ないの役立たず』『管理局の面汚し』とか言われてたみたいです」

和「何と言つことを・・・!」!

奏「・・・その侮辱した人の名前は分かる?」

~~~~~

奏「ありがとう、なのは」

僕は会議室を出ると、恭二に会い、侮辱した男の情報を集めるように頼んだ。恭二はティアナの努力の原因を聞くとすぐに了承してくれた。

奏「頼むね。恭二」

恭「任せて貰おう」

僕は恭二と別れると外に出た。

奏「・・・」

僕は近くに立っている木の前に立つと・・・

バキッ！！ ドザーー

木に鉄拳を打ち込み一本の木を倒木へと変えた。

――回想終了――

奏（ティアナがそんな重荷を抱えていたなんてね）

僕はティアナに再び話かけた。

奏「頑張っているね、ティアナ」

テ「奏さん……」

奏「たまには休息も必要だよ？はい」

僕はスポーツドリンクをティアナに渡した。

テ「あ、ありがとうございます」

奏「少し座ろうか？」

僕とティアナは近くにあったベンチに座った。

奏「この前からこんなに自主練しているけど体は大丈夫？」

テ「大丈夫です。限界近くでいつもやめていますから」

奏「そうか。……ティアナ。君がそんなに頑張る理由って何？」

テ「以前にもお話したように奏さんには関係・・・」

奏「君のお兄さんのこと？」

テ「っ！！どうしてそのことを！？」

奏「なのはから聞いたよ。・・・ティアナ。君は執務官を目指しているそうだね？」

テ「はい。だからこれくらいやらないといけないんです！！」

奏「それは自分の意志？」

テ「どういことですか？」

奏「君は兄さんの無念を晴らしたいから執務官を目指しているの？」

テ「そ、それは・・・」

奏「まあ。僕が君の事に首を突っ込むつもりはないけど、二つ言うことがある」

僕は立ち上がり、空を見上げた。

奏「『無理と無茶は全く違う』事と『心を同じ時に縛りつけても自分を苦しめるだけ』だよ」

テ「・・・」

奏「僕が言いたいことはこれだけ。じゃあ頑張ってね」

僕はティアナにそう言うつと部屋に戻った。

不敗【カナデよ。今更だが何故お前はあの小娘を気にかけているのだ？】

奏「・・・僕には妹がいたんです。今はもう他界してしまいましたけど」

不敗【すまん。わしとしたことが・・・】

奏「気にしないでください師匠。妹とティアナがよく似ているんです。その時のお節介癖が出てきたんだと思います」

不敗【お前らしいことよな】

僕はそのまま意識を手放した。

翌日

僕たち4人はなのはたちスターズの模擬戦訓練があると聞いて来てきたそこにはフェイトたちライトニングのメンバーもいた。しかし気になったのはティアナの動きにキレがなくなぎこちなかった。そして挙げ句の果てにはスバルとの無茶なクロスシフトでなのはに攻撃をしかけようとすると・・・

な「レイジングハート・・・モードリリース」

レ【オールライト】

ドカーーーン

と凄まじい音と共に煙が巻き上がった。

奏「どうなった!？」

和「分からない。しかしスバルとティアナは・・・」

恭「無茶をしすぎだ」

修「俺でもあんな無茶はしない・・・いや。あれは無理だ!」

奏「・・・(っ!!何だ!?この『気』の乱れは!?この気は・・・
なのは!?まさか!!)」

煙が晴れると、スバルとティアナの攻撃を素手で受け止めて、ティアナの攻撃を受け止めた指からは血が出ていた。

な「おかしいな・・・2人ともどうしちゃったのかな・・・」

奏 サイドエンド

スバル サイド

テ「あ・・・」

な「訓練の時は素直に言うこと聞いて・・・実戦でこんな無茶するなんて・・・練習の意味・・・ないじゃない・・・」

ス「あ、あの・・・」

な「私の教導・・・そんなに間違っているかな・・・？」

テ「くっ!!」

ティアはなのはさんから離れると銃状態のクロスミラージユを構えました。

テ「私は!!・・・私もう失いたくない!!傷つけない!!・・・だから!!・・・強くなりたいんです!!」

ス「ティア・・・」

な「・・・少し、頭冷やそうか・・・。クロスファイア」

テ「うわあああ!!ファントムブレ・・・」

な「シュート・・・」

ドカーン!!

なのはさんの指先から魔力弾が撃たれるとティアナに直撃しました。

ス「ティアー!!はっ!?バインド!?!」

ティアを助けに行こうとすると私はなのはさんのバインドによって拘束されてしまいました。

な「じつとして・・・よく見てなさい・・・」

そしてまた魔力弾はティアに魔力弾が放たれました。

ドカーン!!

ス「ティアーーーー!!」

私はティアに直撃したと思い叫びました。でも・・・

な「どうして邪魔したんですか?・・・奏さん」

ス「え?」

煙が晴れると奏さんがバリアジャケットを纏って、ティアナを庇っていました。そして驚いたのは羽のような物が壊れているのはまだ分かりますが、左腕が無くなっていました・・・

スバル サイドエンド

奏 サイド

奏「くっ!!」《和葉!なのはを止めてくれ!俺はティアナを助ける!恭二と修也はヴィータとフェイトの足止めを頼む!》

和・恭・修「」分かった!」

奏《行きます!師匠!》

不敗《任せよ!!》

和《行くぞ！ドモン》

ド《こつちもムシャクシャしていたからな・・・丁度良いぜ！！》

奏・不敗「【マスター！！】」

和・ド「【ゴッド！！】」

ーセットアップ！！ー

僕はティアナの元に、和葉はなのは元に急いだ。

奏（間に合ってくれ！！）

なのはから二発目の魔力弾が放たれると僕は魔力弾とティアナの間に入り込み、背中を盾にしてティアナを庇った。

ドカーン！！

直撃すると背中【マスタークローク】は吹き飛び、左腕も吹き飛んでしまった・・・それと同時に凄まじい痛みが僕を襲った。

奏「ぐっ・・・くっ・・・」

不敗《カナデよ！何故マスタークロークを閉じなかった！？あの程度の砲弾なら十分にクロークは耐えたぞ！？》

奏《すみません師匠。はあ・・・はあ・・・これには僕の考えがあるんです》

テ「か、奏さん……」

奏「はあ……はあ……大丈夫か？結^{ゆい}」

テ「え？」

奏「あ……すまない。間違えた……」

な「どうして邪魔したんですか？……奏さん」

和「それはお前が間違っているからだ！！なのは！！」

和葉は【ゴッド・スラッシュ】を引き抜くとなのはに斬りかかった。

な「くっ！？」

レ【プロテクション】

バチバチ！！

和葉の剣となのはシールドがぶつかり火花が散った。

和「行け！奏」

奏「すまない和葉。ぐっ！！」

僕はティアナとバインドを和葉によって解かれたスバルを連れて移動した。

~~~~~

奏「ここなら・・・はあ、はあ・・・安全だ・・・」

ス「奏さん！腕が！！」

テ「どうして、私を庇って・・・」

奏「その理由は・・・くっ・・・あとで話すよ。だから今は・・・ねむら・・・」

ガクリ・・・

ス・テ「奏さん！！」

僕の意識は痛みによって刈り取られた。

奏 サイドエンド

## 第二十二話 白い悪魔VS白い神（前書き）

今回は和葉となのはの戦闘風景です。（なのはファンの方々。申し訳ありません）

## 第二十二話 白い悪魔VS白い神

恭二 サイド

ヴィ「あいつらー!!」

フェ「早く2人を止めないと!!」

ヴィータとフェイトはバリアジャケットを身に纏うと和葉となのはを止めに行こうとするが私と修也がそれを許さない。

恭「ここから先は・・・」

修「行かせるわけには行かないね!!」

シュ【行くぞ!恭二!】

サ【行こうぜ?修也!】

恭・シュ「【シュピーゲル!】」

修・サ「【ドラゴン!】」

ーーセットアップ!ーー

私と修也はデバイスを起動させると、ヴィータとフェイトの前に立ちふさがった。

ヴィ「お前ら!何で邪魔すんだよ!?!」

フェ「お願い恭二！そこを退いて！！」

恭「あいつらを止めたければ私たちを倒してからにしろ！！」

修「その前に和葉がなのはを止めてくれと思うけどね」

ヴィ「どけー！ー！！！！」

ヴィータは『グラーフ・アイゼン』を握りしめ、修也に殴りかかったが修也は『フェイロン・フラッグ』軽く受け流し・・・

修「ごめん・・・ヴィータ」

バシッ！！

ヴィ「う・・・」

ヴィータの首の延髄を『フェイロン・フラッグ』で軽く叩き、気絶させた。

フェ「ヴィータ！」

恭「フェイト。ここは和葉に任せてくれないか？私は君と戦いたくない。頼む！」

フェ「・・・分かったよ。恭二」

そう言うとフェイトはバリアジャケットを解除してくれた。

恭「ありがとう、フェイト」

エ「あの！ヴィータ副隊長は大丈夫ですか？」

修「気絶させただけだから大丈夫だよ。俺はヴィータを医務室に連れて行くね」

キ「あ。私も行きます。お手伝いができますと思います」

修也はデバイスを解除するとヴィータを抱きかかえ医務室へと向かった。その後をキャロとフリードがついて行った。

恭（ここは何とかなった。和葉。頼むぞ！！）

恭二 サイドエンド

なのは サイド

な「和葉さんも邪魔するんだね・・・和葉さんも頭冷やそうか・・・」

和「頭を冷やすのはお前だ！なのは！！」

な「・・・アクセル・シューター」

レ【アクセル・シューター】

な「・・・シュート」

私は和葉さんに向かって魔力弾を5〜6個撃ちました。

和「それがお前の思いか、なのは。なら俺はその思いを受け止める  
！！分身殺法！！ゴッド・シャドー！！」

な「何を・・・！？」

私が撃った魔力弾は分身した和葉さん6人が一つずつ受け止めてしまいましたが。そしてその和葉さんの分身が一つに集まり、受け止めた魔力弾を豪快に両手で押しつぶしてしまいました。

な「すごいね和葉さん・・・そんなこともできるんだ・・・」

和「なのは。お前はティアナの気持ちを分かっていたんじゃないのか！？」

な「勿論・・・知っていましたよ？」

和「なら何話し合わなかった！？何故教導の意味を教えない！？」

な「・・・」

和「昔のお前はとうした！？昔の君はこんな時は解り合おうとしていたはずだ！！」

な「っ！五月蠅い！！和葉さんに・・・和葉さんに私の何が分かるって言うんですか！！」

レ【ディバイン・バスター】

和「なのは！！・・・これはバインド！？」

な「和葉さん・・・今度こそ頭を冷やして下さい・・・」

和「くっ!」

な「デイベイーーン!!バスターーー!!」

ドガアアアン!!!

【レイジングハート】から発射されたデイベインバスターは和葉さんを簡単に飲み込みました。

な「・・・終わりです・・・和葉さん」

和「その言葉は相手の状態を確認してから言った方が良いと思うがな・・・」

な「えっ!」

私は慌てて後ろを振り向くと体が金色になり、畳まれていた羽は6枚の翼になり、日輪ひのわが出来ていました。

なのは サイドエンド

和葉 サイド

和《間一髪だったな、ドモン》

ド《お前も相変わらず無茶をするな》

な「どうして？私の砲撃は和葉さんを捕らえていたはず・・・まさか！！」

和「なのはの想像通りだ。デイベイン・バスターが直撃する時にこの『明鏡止水』を発動させ、バインドを引きちぎり、やられたように見せたただけだ・・・これで終わらせて貰うぞ。これ以上の戦いは無意味だ！！」

ド《決めてやろうぜ！カズハ！》

和・ド「【俺のこの手が真っ赤に燃える！！勝利を掴めと轟き叫ぶ！！】」

なのはは俺の『この技』を見て焦ったのか・・・魔力弾を次から次へと撃ってきたが・・・俺は紙一重でかわし、なのはに急接近した。な「レイジングハート！！」

レ【プロテクション】

和・ド「【ば〜〜く熱！！ゴッド！！フィンガー！！！！！！】」

俺のゴッドフィンガーとなのはのプロテクションがぶつかり、火花が散り始めた。

ピシッ・・・パキッ・・・

だが俺のゴッドフィンガーの方が上だったのかなのはのシールドにヒビが入り始めた。

な「そんな・・・シールドにヒビが!」

和「うおおおおお!」

そして・・・

バキン!!

となのはのシールドを破壊するとそのまま・・・

ガシッ!!

となのはの頭を掴んだ。

和「少し眠れ・・・なのは。ヒート!! エンド!」

俺が叫ぶと・・・

ドガーーーーン!!!

となのはを掴んでいた右手が爆発し、なのはを気絶させた。

な「・・・」

和「ティアナなら分かってくれるはずだ。なのはの教導の意味を・・・」

その後俺はなのはと奏を医務室につれていき、この模擬戦は幕を閉じた。



## 第二十三話 戦いの後で・前半（前書き）

なのはのキャラが壊れているかもしれません。それでもよろしければどうぞ。

## 第二十三話 戦いの後で・前半

奏 サイド

奏「ん・・・ここは」

不敗【目が覚めたか、カナデよ】

奏「師匠。僕はあの後どうなったのですか？そしてティアナは？」

不敗【ここは医務室だ。あのティアナと言う小娘はお前が庇ったから大した怪我はしておらん。我を見失ったなのはと言う小娘はカズハが止めてくれたぞ。全くお前ともあるう者がこんな事をするとはわしも思ってもみなんだわ！！】

奏「すみません。でもティアナに無理と無茶の事を理解してくれるなら腕一本くらい安いものですよ」

不敗【・・・お前は何を言っているのだ？お前の腕はあるぞ？】

奏「え！？」

僕は慌てて左腕を見ると確かに腕があつた。

奏「どうしてですか？僕はあの時確かに腕を吹き飛ばされたはず！」

不敗【簡単に言うならば『モビルスーツレースシステム』と同じ事だ、カナデよ。デバイスを装着しているときに体の部分を失って

もお前の『体』が消えることはないがその痛みがフィードバックして、お前の『神経』にくると言うことだ。お前の場合腕を吹き飛ばせたことによりしばらくの間は左腕を動かすことはできんぞ】

奏「・・・確かに腕はありますけど全く動きませんね。無理に動かそうとすると激痛が走ります。そう言えばみんなは？どこに？」

不敗【お前が目覚める少し前に警報がなつてな。恐らくヘリポートじゃろっ】

奏「分かりました」

シャ「あ、奏さん。目が覚めたんですね。でも運び込まれた時は驚きましたよ？左腕が無くなっていたんですから」

奏「心配かけてすみません。僕たちのデバイスは少し特殊なんですよ」

――シャマルに説明中――

シャ「分かりました。では今からギプスをつけますけど、しばらくの間は安静にしておいてください」

奏「分かりました」

僕はシャマル先生にギプスをつけて貰うと、ヘリポートに急いだ。

~~~~~

テ「言うことが聞けない奴は、使えないって事ですか」

な「自分で言つてて分からない？当たり前的事だよ」

僕がヘリポートに着くと、和葉達、スターズ、ライトニングのメンバーが集まっていたけど、なのはとティアナが言い争っているように見えた。

テ「私はなのはさん達みたいにエリートじゃないし、スバルやエリオみたいに才能ありません。ましてやキャロみたいなレアスキルも！！だから私は少しの努力でも死ぬ気でやらないと強くなれません！！」

奏（ティアナ。その心がけは大事だけど。君は大切な事をまだ理解していないんだね）

するとシグナムがティアナの胸ぐらを掴み、殴り掛かろうとしていた。

奏（・・・まあ。ティアナ1人が悪いわけじゃないけどね）

僕は【神速】を使い、ティアナとシグナムの間に入り込み・・・

バキッ！！

シグナムの鉄拳を左頬に受け、ティアナを庇ったけど、威力があったのか少し吹き飛んだ。

シ「なっ！！紅！？」

テ「奏さん！？」

奏「いたた・・・ふう。今日は怪我してばかりだね」

和「奏！？お前、腕は大丈夫なのか？」

奏「まあ、動かないけど。しばらくしたらまた動けるようになるよ。
・・・なのは。君は出撃の前にやることあるんじゃないのか？」

な「・・・」

修「俺もそう思うよ？なのは」

恭「ガジェット殲滅は私と修也とフェイトとヴィータに任せてもらおう」

和「なのははFWたちに理解してもらうべきだと思うぞ？なのはの教導の意味を・・・」

な「・・・分かりました。フェイトちゃん。ヴィータちゃんお願いできるかな？」

な・ヴィ「分かった（ぜ）」

な「じゃあFWたちはロビーに集合してくれないかな？」

和《俺もガジェットの殲滅に協力しないで良いのか？》

恭《和葉なのはについてやってくれ》

修《ガジェットくらいすぐに片づけてくるさ》

そう言うと、なのはとFW達はロビーに向かい、恭二達はへりに乗り込みガジェット殲滅に向かった。

奏 サイドエンド

和葉 サイド

和「・・・どうやらFWたちはなのはの教導の意味を理解してくれたみたいだな」

その後、なのはは自分の過去を失敗をFWたちに話して、教導の意味を伝えた。そしてなのはとティアナもお互いの考えを理解し合えたみたいだ。恭二達もガジェットを容易に殲滅して六課に帰ってきた。

和「取り敢えず一件落着か・・・」

ド【カナデは怪我をしたけどな】

和「それを言うな・・・ドモン」

俺とドモンが話していると・・・

コンコン

とドアを叩く音が聞こえた。

和「誰だ？こんな時間に」

今更だが今の時刻は午後10時だった。FW達はもう寝ていると思うのだが・・・俺がそんな事を思いながらドアを開けると、なのはが立っていた。

和「どうした？なのは。こんな時間に」

な「いえ。少し和葉さんとお話がしたくて・・・」

和「なるほど」

俺はなのはを部屋に通すと、コーヒーを淹れてきた。

和「ホットコーヒーで良かったか？」

な「あ、はい。ありがとうございます。・・・和葉さん、今日は本当にすみませんでした!!」

なのははコーヒーを一口飲むと、俺に頭を下げてきた。

な「和葉さんが私を止めてくれなかったら、ティアナは・・・」

和「・・・」

な「私は何が間違っていたんでしょうか・・・？」

和「・・・全てが間違っていた訳ではないと思うが、俺から見て、間違っていることは2つある。『自分の考えを言葉にしなかった』事と『悩みを一人で抱え込んでいた』事だ」

な「・・・」

和「俺たちは所詮人間だ。1人で出来る事と出来ない事に別れてくる。それを1人で解決しようとするとか今日みたいなことになりかねない。それに俺は8年前、なのはに言っただけだ？『仲間を頼れ』と」

な「はい・・・」

和「・・・言いだしづらかったみたいだな。では一つ約束してくれ」

な「何ですか？和葉さん」

和「悩み事があるなら俺に相談しろ。それが約束できるなら今回のことはチャラにしてやる」

な「っ！・・・はい！・・・はい！」

なのはは俺の言葉を聞くと何故か涙を流していた。

和「なのは！？何故泣くことがある？」

な「グスッ・・・嬉しかったんです。私は約束していたことを忘れて、拳げ句の果てには大切な事を教えてくれた和葉さんを傷つけようと思いました。でも和葉さんはそんな私に頼ってくれと言ってくれました」

和「当たり前的事だと思うが？なのはは俺にとって大切な人なんだから」

な「う、うう・・・」

和「我慢しなくて良い・・・俺が付き合ってやるから・・・な？」

な「うわあああん！！！」

なのは俺の胸に飛び込み、これを張り上げて泣いていた。俺が出来たことはなのはの頭を優しく撫で、抱きしめる事しかできなかった・・・

――5分後――

なのは気が落ち着いたのか、俺の胸元から離れた。

和「俺もなのは気持ちに気づいてやれなくて、すまなかったな」

な「うう・・・グスッ、和葉さんは優しくすぎます・・・でも私は・・・」

俺はなのはが何を言ったのか気になりなのはに顔を近づけると・・・

な「ん・・・」

和「ん！？」

といきなりなのはに唇を奪われてしまった・・・

和「ぷはっ！！な、なのは！？／／／」

な「私は・・・そんな和葉さんが大好きです。助けて下さったあの時から・・・ずっと・・・／／／」

和「なのは・・・」

な「返事は何時でも良いですから。では、おやすみなさい／＼」

なのははそう言つと逃げるように俺の部屋から出て行った。

和「俺は・・・どうすれば・・・」

ド【・・・】

俺はただ一人、コーヒを口にしながら考えていた。

第二十四話 戦いの後で・後半（前書き）

ティアナのキャラが壊れています。それでも宜しければどうぞ。

第二十四話 戦いの後で・後半

和葉となのはが話している同時刻

奏 サイド

奏「何とかティアナたちはなのはの教導の意味を理解してくれたみたいですね」

不敗【お前は怪我をしたがな】

奏「そのことは言わないで下さい、師匠」

僕と師匠が会話をしていると・・・

コンコン・・・

と誰かがドアを叩く音が聞こえた。

奏「誰かな？」

こんな時間に僕を訪ねて来る人は和葉たち3人くらいだった。そんなことを思いながらドアを開けると・・・

奏「ティアナ？」

テ「奏さん・・・」

寝間着姿のティアナが立っていた。そして心なしか震えているみた

いだった。

奏「どうしたの？こんな時間に」

テ「すみません、奏さん。私、どうしても奏さんに言いたいことがあつて・・・」

奏「取り敢えず部屋に入ろうか？」

テ「はい・・・」

僕はティアナを部屋に入れると缶紅茶を持ってきた。

奏「ごめんね、ティアナ。本当なら紅茶を淹れたいんだけど片腕だけじゃ無理だからこれで我慢してね」

テ「い、いえ。ありがとうございます」

僕は缶紅茶をティアナに手渡しすと本題に入った。

奏「それで、話って何かな？」

ティアナは缶紅茶を少し飲むと僕に頭を下げてきた。

テ「・・・奏さん。ごめんなさい！！私のせいで・・・奏さんの左腕が動かなくなってしまうました」

奏「これ？ティアナが気にすることはないよ。二度と動かないって訳じゃないし。それにこれは僕の意志でもあるんだから」

テ「え・・・奏さん。もしかして・・・わざと!？」

奏「・・・ティアナに分かってもらいたかったんだよ。『無茶をやっても良いことよりも悪いことの方が多いこと』とそしてそれが周りの仲間を危険に晒してしまうことをね。その仲間を例えるなら君の相棒のスバルだね」

テ「っ!!」

奏「ティアナ。あの模擬戦は相棒のスバルを危険な目に遭わせてでも達成しなければならかったこと？」

テ「それは・・・」

僕が聞くとティアナは僕から目をそらし、俯いてしまった。

奏「・・・君に約束して欲しいことがある」

テ「・・・何ですか？」

奏「『今後は無茶な戦闘はしない事』と『悩みごとがあるなら僕に相談すること』。この二つを約束できる？その事が約束できるなら今回のことはナシにしてあげる」

テ「・・・グスツ、はい!」

ティアナは僕と約束を交わすと涙を流していた。

テ「ご、ごめんなさい、奏さん。いきなり・・・こんな・・・ヒツク」

奏「・・・」

僕はティアナを右手で優しく僕の胸元に抱き寄せた。

奏 サイドエンド

ティアナ サイド

私は奏さんと約束をすると何故か嬉しくて涙が流れてきた。そして奏さんは自分の胸元に私を抱き寄せてきました。

テ「か、奏さん！？いきなり何を・・・！？／＼／」

奏「ずっと一人で辛かったよね？よく頑張ったね、ティアナ」

テ「あ・・・」

奏「僕も家族を亡くしたからティアナの気持ちは痛いほど分かるよ。でも今日からは僕が居てあげるから安心して？ティアナ」

テ「う、うう・・・奏・・・さん」

奏「我慢することはない。ためていたものをはき出して良いよ？ティアナ」

テ「う、うわああああ！！！！」

私は奏さんの優しさに触れて、今までためてきた涙が一斉に流れ出して、奏さんの胸元で声を張り上げて泣いた。奏さんはその間私の

頭を優しく撫でてくれた。

ティアナ サイドエンド

奏 サイド

僕が優しく語りかけるとティアナは胸元で声を張り上げて泣いた。鳴き声が外に響いているんじゃない？って思っているかもしれないけど、ゼウスさんから貰った楽器を出せる白いプレスレットから出る『防音結界』を張っているから外に漏れることはないよ？そしてティアナは僕の胸元から離れた。

奏「すっきりした？ティアナ」

テ「はい。ありがとうございます、奏さん」

奏「そっか。良かった」

テ「・・・えっと。奏さん、一つお願いがあるんですが・・・／／」

奏「何？ティアナ」

ティアナを見てみるとモジモジしながら顔を赤らめていた。

テ「えっと／／これから奏さんの事・・・に、『兄さん』って呼んでもいいですか？／／／」

奏「え！？」

テ「ダメ・・・でしょうか？／／」

奏「う・・・（上目遣いで涙目で頼まれちゃ、断るに断れない。でも僕自身は嫌じゃないけどね）分かった。良いよ？僕の事を兄さんって呼んでも。あと敬語も必要ない」

テ「あ、ありがとうございます・・・じゃなかった。ありがとう、兄さん」

奏「よく言えました」

僕はティアナの頭を優しく撫でた。こうしていると妹の結のことを思い出してしまう。僕は結を励ましたりする時によく頭を優しく撫でていた。

テ「ん／／・・・って、子ども扱いしないで！兄さん！！」

奏「あはは。ごめん、ティアナ」

テ「罰です。今日は兄さんと一緒に寝ます／／」

シーン・・・

奏「・・・え？」

僕はティアナが言ったことを聞き取ることは出来なかった。

テ「だ、だから。今日は兄さんと一緒に寝るって言ったの！！／／」

奏「（子供扱いしないでって言ってたくせに、十分に子供だね。ま

あ、気持ちは分かるけどね）分かった」

その後僕とティアナは一緒にベッドに入り、意識を手放した。

奏 サイドエンド

修也 サイド

翌日、何時もは6時過ぎに必ず起きる奏が7時を過ぎても中々起きて来ないから俺は奏を起こしに来た。しかも何故か隣にはやてがいる。

修「何ではやてがいるの？」

は「ええやん、修也君。もしかしたら奏さんの寝顔が見られるかもしれへんしゅ」

修「はあ。狸だね、はやて」

は「お褒めの言葉、ありがとう」

修（別に褒めた訳じゃないけど・・・）

サ《相変わらずだね、はやてお姉ちゃん・・・》

たわいない話をしている間に俺とはやては奏の部屋の前に着いた。

修「奏？そろそろ起きた方が良さと思うよ」

シーン・・・

俺が呼びかけても奏は返事をしてこなかった。

修「入るよ？」

俺とはやては奏の部屋に静かに入った。

修「奏。何時まで寝て・・・」

俺は奏のベッドを見たとなん言葉を失った。

は「どうしたん？修也君・・・はっはっん。これはこれは」

俺とはやてが見たのはまるで本当の兄妹のようにティアナが奏に寄り添って眠っている姿だった。

テ「ん・・・兄・・・さん」

修「こうしてみると本当の兄妹のようだね？はやて（小声）」

は「これは良いもんが撮れたわっ。奏さんの寝顔。これを焼き増しして売るでっ！」（小声）」

そこには狸の耳と尻尾を生やしたはやてがいた・・・

修「・・・聞こえてないか。って奏の寝顔の写真なんか売って得になるの？（小声）」

は「当たり前やんか。修也君たち民間協力者4人は六課の女性たちに人気なんやで？（小声）」

修「そうなんだ。でもばれたら奏から大目玉食らうよ?（小声）」

は「ばれんかったらオツケーや。さあもう行くで? 奏さんとティアナ、もう起きそうや（小声）」

修「分かった。《サイ・サイシー。今のこと奏達に知らせなくて良いよね?》」

サ《教えなくて良いと思うよ? オイラも奏の焦った顔が見てみたいしね》

修《分かった》

俺たちは奏の部屋を後にした。そして奏達はすぐに起きてきた。そしてはやては奏の寝顔の写真を勝手に撮ったことがばれていて奏からO H A N A S H Iされたみたいだった。

修也 サイドエンド

奏 サイド

ティアナが僕のことを兄さんと呼ぶようになったの日から三日が経った日の夜中、僕はとある少将の豪邸を訪ねた。と言うより忍び込んだ。恭二から貰った情報を元にここに少将がいると分かったからだ。左腕は少しづつ『気』で治し続け、今では普通に動くようになった

奏「さて……僕の大切な妹の大切なものを侮辱した奴を潰しにいきますか……」

不敗「カナデよ。この豪邸の防犯センサーはわしが押さえた。あとは存分に暴れてよいぞ」

奏「師匠ってほんとに何でもありですよね・・・」

不敗「気にしなくて良い。さあ行くぞ！カナデよ！！」

奏「はい！！」

奏・不敗「【マスター！！セツトアップ！！】」

デバイスを身に纏うと僕はまずこの豪邸に巡回しているガードマンからつぶすことにした。

「今日も異常なしか・・・」

「そりゃそうだろ？ここに入ってくる命知らずはいないと思うぜ？」

奏「じゃあその命知らずにやられる気分を味合わせてやるつか？」

「何！？・・・グハッ！！」

僕は【神速】を使い、巡回していた2人のガードマンの背後を取り、手刀を首の延髄に叩き込んだ。

奏「お前達に恨みはないがしばらく大人しくしておいてもらっ」

僕は次々とガードマンを気絶させていった。

~~~~~

「少将！少将！！」

少「何だ？何事だ。俺はもう寝るぞ」

「お逃げ下さい！何者かが侵入・・・」

バシッ！！

少「何！？」

奏「あんたか？今の管理局の少将は？」

少「そ、それが何だ？それに貴様どうやってここに侵入した！？防犯センサーやガードマンがいたはずだぞ！？」

奏「簡単なことだ。センサーはハッキング。ガードマンは俺が『全員』気絶させた。そこに倒れている奴が最後だった」

少「バカな！？ガードマンだけでも100近く居るんだぞ！？」

奏「貴様の一つだけ聞く。『ティーダ・ランスター』と言う男を知っているな？」

少「あ、あの『出来損ない』が何だ！？あんな男、管理局の『面汚し』だ！！」

ブチッ！！

奏「……師匠。こいつの顔。変えて良いですか？」

不敗「好きにするが良い。わしが言うのはなんだが、死者を冒瀆する者はわしも見捨てるわけにはいかんのでな」

奏「《分かりました》……冥土の土産に一つだけ教えといてやる」

ゴワッ！！

僕は一気に殺気を放つと……

少「ひいいい！！く、来るなああ！！！」

少将はハンドガンを取り出すと僕に向かって一斉に撃ってきた。

奏「影で見ているだけで……」

バキッ！！ゴスッ！！

僕は【神速】を使い、弾をかわすとハンドガンを蹴り飛ばし、  
鳩尾みぞおちに鉄拳を打ち込んだ。

少「ゴハッ……」

奏「何もしていない奴が……」

バチン！！

さらにマスタークロスで顔面を張り倒した。

少「ギャッ・・・」

そして少将が立ち上がった所で・・・

ドガガガガガ！

奏「死者の行動を冒流するな――！！！！」

無数の鉄拳を顔面に打ち込んだ。当然顔立ちは全く変わっている。

少「す、スミ・・・マセンでした」

ガクッ！！

と少将は気絶してしまった。

奏「帰りましょう、師匠」

不敗【そうするか】

僕たちは六課に戻ってくると・・・

恭「終わったようだな、奏」

奏「ありがとう、恭二。集めてくれた情報がとても役に立ったよ」

恭「今日はもう休め。このことは私たちだけの秘密だ」

奏「分かった」

僕は部屋に戻り、意識を手放した。

翌日

「次のニュースは昨日未明、時空管理局の少将の自宅に何者かが侵入し、少将が大怪我を負う事故がありました」

な「あ！この人って最近汚職で有名になった人だね」

修「如何にも何かやってますって顔をしているね」

「現在調査中ですが犯人の足取りは掴めていません。みなさんには十分に警戒をするようにお願いします」

フェ「怖いね。エリオ、キャロ。ちゃんと寝るときは戸締まりを確認してね？」

エ「はい！フェイトさん」

キ「でも何かあったらお兄ちゃんたちが助けられますよね？」

和「勿論だ」

恭「私もエリオたちの事を全力で守ろう（私たちは今回の犯人のこ  
とを知っているがな・・・）」

シュ「お前は和葉達には話したのか？」

恭「うむ。勿論内緒にするように頼んでおいたがな」

奏「ふあゝゝ。おはよう、みんな」

ス「あれ？奏さん、何だか眠そうですね？」

奏「うん。ちよつと昨日夜遅くに『ゴミ掃除』をね。中々暇が無かったから」

不敗《ややこしい言い方をするのう。カナデよ》

奏《和葉達には言えましたが、仮にもあのゴミは少将ですからね、うかつに出せませんよ。このことは》

ス「へえゝゝ。じゃあ今度奏さんの部屋に行つて良いですか？」

奏「良いよ」

テ（昨日夜遅く・・・ゴミ掃除・・・もしかして、昨日の事件の犯人って・・・ふう。やっぱり兄さんには敵わないな・・・でも。ありがとう、兄さん）

奏 サイドエンド

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5006v/>

---

魔法少女リリカルなのはStrikers―武闘家の心を受け継ぐ者達

2011年10月9日00時50分発行